

ゴジラ vs ポプ子

闇鴉慎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

20XX年11月7日（月・大安）、11時35分。

鎌倉海浜公園に巨大不明生物、再上陸。

同、16時45分。

多摩川河川敷を絶対防衛ラインとする「タバ作戦」、失敗。

同、18時42分。

内閣総理大臣大河内清次他主要閣僚、死亡。

東京都心——壊滅。

タイムラインが実況ロールプレイに沸き上がり、水をさす冷淡なツイートを許さぬ同調圧力が蔓延^{はびこ}る中、もはや世界を守る術は完全に失われた——

——かに思われた。

が!!! そのとき!!!

焔を背に迫り来る巨影を前にして、凜然と立ち塞がる戦士がひとり。

眼には憤怒を。

腕には血潮を。

身には闘志をみなぎらせ!

雄々しく中指勃てる少女がひとり!!

さあ——ア!!!

打ち切られがちの女子中学生が初めての死合しあいの相手として選んだ相手は——!!

キングオブモンスターとして同じく初めての死闘を迎えるこの獣!!

その名はアアア

ゴジラ——アア・ザ・カイジユウウ——ウウウ!!!
バーサス
VS ツツツ

ポプ子オオオ——オオオモロオオ——ウウ——ウ!!!

ゴジラ「どちらかが

死ぬまでやろう」

ポプ子「OK♥」

『ゴジラvs大仏』の闇鴉慎が贈る、シン・ゴジラ2次創作第2弾!!
ハイスピードクソアクション 『ゴジラvsポプ子』
堂々開幕!!!

——このクソの向こうに、答えはあるのか。

目次

1. 死闘	1
2. 復讐の誓い	11
3. 新・ゴジラ	20
エピソード4／新たなるポプ子	27
5. ゴジラ vs ポプ子 (前編)	37
6. ゴジラ vs ポプ子 (後編)	45
7. 最狂の敵	54
8. 同志	61
9. バイバイ、ララバイ	68
最終話 Gポプチン大勝利！ 希望の未来へレディ・ゴーツ！	78
エピローグ	96

1. 死闘

11月7日(月・大安)。
11時35分。

鎌倉海浜公園に巨大不明生物(政府による呼称:ゴジラ)、再上陸。
東京を目指し、平均時速4.8kmで北北東に進行。
同、16時30分。

東部方面総監を指揮官とした統合任務部隊^{JTF}は、多摩川を絶対防衛ラインと想定しゴジラ駆除を目的としたB-2号「タバ作戦」を開始。
同、16時45分。

「タバ作戦」、失敗。

ゴジラは一時的に北北西に転進するも、その後進路を修正。
都心部へ向けて、なおも進行中……

*

一方、そのころ。

都内某所に女子中学生2人の姿が見られた。

ポップ子——短い身体に滾る^{たぎ}マグマのごとき激情を秘めた、どこにもいる中学2年生。

ピピ美——長い身体に凍てつく凶刃のごとき切れ味を秘めた、どこにでもいる中学2年生。

ポップ子がピピ美に、ピョンと跳ねながら提案する。

「おままま()としましよ♡」

「そーしましよ♡」

「シンゴジ襲来タイムテーブルに合わせてなりきり実況ツイート♡」

「COOL COOL COOL」

「〴〵一般人がこの時点でそんな情報知ってるわけねーだろ」ってクソ
リップ♡」

「COOLからHOTになっちゃった」

その時、突如として地を揺るがす振動と重低音。

それを聞いたポプ子の眼球周辺に、ビキィ！ と血管が浮き出た。

「あ、ア、ン!？」

窓を叩き開けると、その向こうには、暗くなりはじめた空をバックに、一步一步こちらに迫ってくる巨大不明生物――

ゴジラの姿。

我が物顔で街を踏みつぶすゴジラを見て、ポプ子の怒りが爆発した。

「ツダロガケカスウ――！」

ツスケガダラアア!!」

「すごい闘志」

ポプ子は、こんなこともあろうかと常備している釘バットを2本取り出した。

片方をピピ美に投げ渡す。これでおそろいだ。

「行くぞッ！ 夢がアタスを呼んでいるッ！」

「魂のシャウトさレツゴーパッション!!」

バシユウ!

窓から舞空術で飛び出したポプ子とピピ美は、一直線にゴジラに向かっていく。

*

2人が飛び去ったあとには、女の人と、ツイッターで物申すマンが取り残されていた。

ツイッターで物申すマンが、ツイッターで物申しはじめた。

『ツイッターで物申すマン@twitter|de|mono』

今、ゴジラに命がけで戦いを挑む人たちを見かけました。こんなときに実況ツイートで盛り上がるのはどうかと思います。不謹慎では?』

女の人は、スマホをいじるツイッターで物申すマンを不審げに見る。

「ね……ねえ、ツイッターで物申してないでさ。
あなた行かないの?」

ツイッターで物申すマンは腕組みして彼方の空を見やった。

「飛べねえんだよ。オレは……」

「ど……どうも……」

*

ゴジラ、依然進路を変えず東京駅方面に向けて進行中。

その背後には、ゴジラに踏み潰された街の瓦礫が赤い線のようにどこまでも伸びている。

ポプ子とピピ美はゴジラ上空にたどり着いた。

2人空中に並んで、ゴジラの威容を見下ろす。

「やるぞ! ピピ美ちゃん!」

「おうさ! ポプ子ちゃん!」

呼吸を合わせ、2人は上空に螺旋を描きながら飛翔した。

手にしたおそろいの釘バットから光線が放たれる。

「チャクラエクステンション!」

「しゅーとおー」

爆発!

さらに息もつかせず畳みかける。

「天空に散らばるあまたの精霊たちよ……我が声に耳を傾けたまえ

……

「ラナリオーン!」

「電撃呪文!!」
ライディン

「プリキュアの! 美しき魂が!」

「邪悪な心を、打ち砕く!」

「プリキュアマーブルスクリュー!!」

「もうひといきじや。パワーをメテオに」

「いいですとも!」

「Wメテオ」

ギョーン！

ギョーン！

ギョーン！

ギョーン！

空から大量の隕石が降り注ぎ、ゴジラを直撃した。

凄まじい威力の黒魔法である。さしものゴジラも、爆炎に飲まれて完全に沈黙した。

ピピ美が掲げた手のひらに、ポップ子がジャンプしてハイタッチする。

「ヒヤッホー！」

だが、そのときだった。

ピピ美が何かを察知して、煙に包まれたゴジラを睨む。

「危ないッ！」

「えっ」

突如、煙の中から閃光がほとぼしり、東京都心もろともポップ子とピピ美を焼き払った！

燃え上がる街を見下ろしながら、煙切り裂き、黒い巨大な影が悠然と歩み出てくる。

——ゴジラ。

ダメージを受けた様子は、ない。

*

ゴジラの口から放たれた熱線による爆発で、ポップ子とピピ美はビルの壁に叩きつけられた。

苦痛をこらえながら、迫り来るゴジラを悔しげに睨む。

「バ……バカナ！ 効いてない!？」

しかし、いち早く立ち直ったピピ美が、ふたたび舞空術で浮かび上がる。

「フツ……もう手段を選んでられねえな」

その凜とした姿に勇気づけられ、ポプ子もまた立ち上がる。

「そうか…… “アレ” だね！」

「そうさ…… “アレ” だ！」

「時間をかせいで！」

「まかせろ相棒！」

2人は素早く飛び上がり、別々の方向に別れた。

ピピ美はゴジラの頭上に肉迫すると、両手の指で三角形を作り、その中にゴジラの頭をロックオンする。

「新気功砲！ はっ!!!」

ピピ美の手から放たれたエネルギーが、ゴジラに叩きつけられた。

ピピ美の命を削って放つ必殺技である。

ゴジラもこれには一瞬怯んだ。

「はっ!! はっ!!!」

ピピ美は、さらに連続して技を放ち、ゴジラをその場に釘付けにする。

一方、ポプ子は手近なビルの上に降り立っていた。

両手を高々と振り上げ、呪文を唱え始める。

—— *Knigh*t of *Dusk*
薄暮の騎士より黒きもの

Blood *Moon*
血染めの月より赤きもの

ローテ
時の流れに埋もれし

偉大な汝の名において

我ここに 闇に誓わん

我等が前に立ち塞がりし

対戦相手にダメージを与えたたびごとに

その対戦相手は手札をすべて捨てる

その対戦相手に手札が残っていない場合

この効果は無視する

「竜破斬！」
ニコルシュート

ゴジラ自身が大爆発を起こした。

これこそが竜破斬ニコルシュートの力である。

これをしかけられて防ぐことのできた生物は、かつて史上に存在しない。

ゴジラ周辺はもうもうと立ち込める黒煙に包まれ、生命の気配さえ感じさせない。

「やったー！」

ポプ子ニコルシュートが飛び上がり、ゴキゲンに指を鳴らして勝利を喜ぶ。

しかしピピ美は、なにか不吉な予感を覚えて、じつと黒煙を見つめていた。

そして、突然吠えるように警告を叫んだ。

「いいや！ まだだ！」

次の瞬間。

“天からふりそそぐものが世界をほろぼす”

黒煙の内側から、無数の青い熱線が、無差別に周囲にまき散らされた！

とたんに爆発が起こり、ポプ子とピピ美を巻き込んで、都心部を跡形もなく破壊していく！

ゴジラ。

その背びれが青く発光し、大量の熱線を放っているのだ。

その姿は弾幕をはる巨大要塞。いや、それ以上。

ポプ子ニコルシュートの竜破斬を受け、ゴジラの身体も深く傷つき、流血している。

しかしそれが、かえってゴジラの狂乱を招いたようだった。

莫大なエネルギーを容赦なくあたりに叩きつけるさまは、破壊の神そのものだ。

ポップ子とピピ美はなすすべもなく吹き飛ばされ、ガレキの山と化した街の中に倒れていた。

ポップ子がうめきながら、頭だけを持ち上げる。

その視界に映るのは、暴れ狂うゴジラの、巨体。

「まさか……アレが通じないなんて……!」

「クッ……!」

ピピ美が意識を取り戻し、なんとか膝立ちになる。

ゴジラは熱線で街を焼き続けている。このままでは東京全体が……いや、この地球そのものが破壊されてしまうだろう。

ゴジラは、強い。

あまりにも強すぎる。

倒す方法は——ない。

にもかかわらず、ピピ美の口に笑みが浮かんだ。

「フッ……」

震える膝を手で支えながら立ち上がり、倒れたポップ子の前に、彼女をかばうように立ちはだかる。

「ピ……ピピ美ちゃん……!」

「やっぱりどう考えてもこれしか……」

地球が……ポップ子ちゃんが助かる道は思い浮かばなかった……」

ピピ美が肩越しに振り返る。

その目には、穏やかな、しかし固い決意の色が浮かんでいた。

「バイバイ、ポップ子……」

「ピ……ピピ美ちゃん!」

ピシユン!!

ピピ美の姿がかき消えた。

瞬間移動だ。

——まさか!

ピピ美の意図を察して、ポプ子の顔面が蒼白になった。

*

ピシユン！

ピピ美が、暴れ狂うゴジラの鼻先に瞬間移動で現れる。

そしてゴジラに手を触れ、反対の手で額に触れ、念じる。

ピシユン！

ピピ美の姿が再び消えた。

ゴジラの巨体とともに。

*

——月面、飯田橋2丁目。

ここに一軒の月面コロニービルがあった。

とある出版社の本社ビルである。

社長は、社長イスにどっしりと腰を落ち着け、のんびり安心しきつ

ていた。

「さすがに月に移転すればヤツらも手が出せないだろう」

そのとき。

ピシユン！

ピピ美とゴジラが本社コロニービルの目の前に出現した。

ピピ美が鼻先を指でかく。

「わりの竹書房さま。

ここしかなかったんだ」

そして——

*

月が、爆発四散した！

はじめ、ポプ子は真っ白になって、頭上の閃光を見つめていた。
やがて——やがて心が事態を受け止めはじめ、次に、涙がこぼれはじめた。

「ピピ美ちゃん……？」

虚空に向かって呼びかける。

こたえは、ない。

「ピピ美ちゃ——ん!!」

ポプ子の悲痛な叫びが響く。

だが、戦いはまだ終わっていないかった。

涙に濡れた視界の中心に、ポプ子は恐るべき姿を見た。

さつきまで月があった場所……そこに、太陽光を浴びて白く輝く影がある。

——まさか……まさか、あれは!?

「ゴジラ!! 生きていたのか!!」

(つづく)

■次回予告■

私、星降そそぐ!

次世代アイドルとして再結集した私たち『ドロップスターズ』!

みんなと一緒なら怖いものなしだよー!

でも敵対プロダクションの傭兵アイドルに襲われて、いきなり大ピンチ!

そのとき絶体絶命の私をかばってくれたのは……

えっ!? まさか、キミは!?

次回、

『星色ガールドロップ project—P—』

第2星「大地 死す」

来週も、恋にオーバードロップ！

2. 復讐の誓い

ポプ子は、動物園のオリの中のゴリラだ。
隣にはゴリラ（ピピ美）もいる。

オリの前には、つきつきに客がやってきて、キヤアキヤア言う。

「あ！ ポプテピピックだー！」

「かわいいー！」

「ゴリラかよ」

「なにこの急展開www」

「さすがにこれは草」

ゴリラ（ポプ子）は（うるせえな）と思って、ダルい動きで客の方に顔を向けた。

よけいに騒ぎが大きくなる。

「きやー!! こっち向いたー!!」

「かわいいー!!」

「シユールwww」

（……………）

バシ!!

ポプ子は観客あなたに中指を勃てた。巨木のような雄々しさだ。

「きやあ——っ!!!」

ますますうるさくなつた。

ポプテピピック

POP TEAM EPIC

作：闇鴉慎

東京上空、380,000km——月軌道上。

無数の岩石が浮遊する中に、ゴジラがただよっている。

ゴジラはとまどっていた。

ゴジラは、自分を傷つけようとする敵に対して、なかば本能的に放射火炎を吐き、周囲の地盤ごと敵を粉碎しようとした。

しかし必殺の一撃を放つ直前、理解不能のなんらかの力によって、突然月にワープさせられたのだ。

その結果、ゴジラの放射火炎は、月と、竹書房と——そして、ピピ美のみを打ち砕いたのだった。

少しの間、静かに思考を巡らせて、ゴジラは自分が目的地から遠く離れてしまったことを認識した。

そして遙か遠くに見える巨大な青い球体こそが、自分の向かうべきところであると理解した。

なんとかして、あの場所に届かせたい。

その一心で、ゴジラは口を大きく開いた。

放射火炎の青い光が、その喉の奥からあふれ出た。

一直線に、地球へ向かって。

*

同時刻、東京。

千代田区北の丸公園——ビッグ武道館。

ここは今、避難所になっていた。

ゴジラの火炎から生きのびた人々が、武道館いっぱいにつめこまれ、不安な夜を過ごしていた。

あちこちから、すすり泣きや、恐怖の叫び声が聞こえる。

ひとつひとつは小さな声だが、万単位の人々が集まると、耳がおかしくなりそうなほどの騒音になる。

みんな、それぞれに、家を失ったり、家族や友達を失ったりしたのだろう。

大やけどを負い、これから命を失おうとしているひともある……

ビッグ武道館のかたすみで、膝をつき、がっくりとうなだれる男がいた。

彼は——ミュージシャン、ヘルシエイク矢野。

「くっさうー」

こんな大変なときだつてのに、オレには何もできないぜエ……！
オレは無力なのか……」
だが、そのとき。

！
絶望のどん底で、ヘルシエイク矢野の目が、逆に熱く燃えはじめた

「いいや！

まだまだ！ オレにはまだ、やれることがある！

それは……ここにいる人たちを、元気づけることだぜ！！

このオレの音楽でな！！」

すつく、と立ち上がったヘルシエイク矢野。

その背後に、別の男の声がかかった。

「よく言った!!」

「なにい!?

ま……まさか、お前は！

マグマミキサー村田!!」

暗闇の中から姿を現したのは、ミュージシャン、マグマミキサー村田だった。

マグマミキサー村田が、ニヤリと笑う。

「キサマひとりでは頼りない。

このオレが力を貸そう」

「マグマミキサー村田ア！」

「おっと、勘違いするなよ。

お前を倒すのはこの俺だ。それだけのことだ」

「フツ……分かったぜ！」

ヘルシエイク矢野。

マグマミキサー村田。

夢の最強タッグが、今、ここに誕生した！

「行くズエ！ マグマミキサー村田!!」

「いいズエ！ ヘルシエイク矢野!!」

「融ゴウーウ合！ ハッ!!」

並んだふたりの体がアーチを作り、その指先が合わさったとたん、閃光がほとばしった。

ふたりの身体が！ ひとつに合わさる！

爆誕!! ヘグマシエキサー村野!!

そしてさらに。

「待ちな！ 俺もいるぜ！」

『ユーロビートの神様!』

「私もお手伝いしますよ」

『ジャズの神様!』

「ワシはパス」

『サボ神!!!』

『みんな……みんなありがとう！』

さあ行くぜ！

最初で最後で最高の!!

俺たちのスーパーセッションだぜ!!!』

ヘグマシエキサー村野の、4本腕をフル活用した超高速ギターソロ

!

ユーロビートの神様の、魂を揺さぶるテクノサウンド!!

ジャズの神様の、胸を打つ哀愁のメロディ!!

その熱い演奏を耳にした避難者たちが、ひとり、またひとりと顔を上げる。

暗く沈んでいた避難者たちの表情に、ヘグマシエキサー村野の燃えるような情熱が乗りうつっていく!

誰もが、生きる希望を取り戻しているのだ!!

その光景を見て、マネージャーのおっちゃんは、脂汗まみれで拳を握りしめる。

「なんてえっつた。

やつらはこの地獄の中でさえ、観客の心のマグマを沸き立たせてやるっ！

ヘルシエイクにしてマグマミキサー！

ヘグマシエキサー村野じゃあ!!」

またたくまに、ビッグ武道館は割れんばかりの歓声に包まれた。まるで武道館が、いや、日本列島全体が震えているようだ。

ヘグマシエキ！

ヘグマシエキ!!

ヘグマシエキ!!!

へ……

*

——そのとき。

月軌道からの放射火炎が、ビッグ武道館を直撃した!!

建物の屋根が融ける。

蒸発する。

中の人々が炭化し気化する。

最後の一瞬まで途切れぬサウンドに包まれたまま——

ビッグ武道館、消滅。

*

『ツイッターで物申すマン@twitterdemono
悪質なデマが出回っているようです。騙されないように！
特に
支援要請にTwitterを用いることは混乱をまね

ツイッターで物申すマン、消滅。

*

「この小説は面白くない！ クソ!!
なんでオレが死ななきやいけないんだ！ クソ！ クソ!! ク
……」
アンチ、消滅。

*

「ぼくベーコンムシヤムシヤくん！
ベーコン食べるの大好きさ！
ベーコン……」
ベーコンムシヤムシヤくんは、目の前の光景をぼんやりとながめ見
た。
だが、そこに広がっているのは、見渡すかぎりの——焼き払われた
荒野のみだ。
「ベーコン……どう？」
ベーコンムシヤムシヤくん、消滅。

*

月軌道上のゴジラは、熱線の放射を止めた。
エネルギーが枯渴したのだ。
それに、この位置からでは、せいぜい日本の地上を全て焼きはらう
ていどなことしかできない、と分かった。
ゴジラは目を閉じた。
今のままでは、宇宙空間に投げ出されて、これ以上どうすることも
できない。
だから、しばし休息を取りながら、考えてみることにしたのだ。
あの青い球体——地球に戻る方法を。

*

ポプ子は目覚めた。

「ピピ美ちゃんーッ!!」

そこは、ボロボロになった民家の中だった。

そばには、老人がひとりいる。

「ム……気がつかれたか。」

ずいぶんと、うなされておった……」

「ピピ美ちゃんー!」

ピピ美ちゃんは!？」

老人は首を横に振る。

「倒れていたのは、あんただけじゃった……」

ポプ子は、それを聞いて、家から飛び出した。

外には、一面の荒野が広がっていた。

月軌道から降りそそいだ熱線によつて、東京の街はあとかたもなく崩壊してしまった。

ガレキ以外何もなくなってしまった街に、ねじ曲がった東京タワーだけがポツンと残っている。

スカイツリーは、ない。完全に蒸発してしまったからだ。

ポプ子は、膝をついた。

拳の中に、地面の灰を握りしめた。

ゴジラに負け、ピピ美が死んだ、あのできごとは……

「夢じゃ……」

なかつたんだ……」

その背後に、一台の車が止まった。

中から飛び出してきたのは、スーツ姿の男だった。

彼のスーツは汚れただけで、顔にもケガがあり、疲れ果てていたが、まだ気力だけは残っているようだった。

「その人！」

「ここは危険だ！ 一緒に避難しましょう」

車の中から、部下が声をかける。

「急ぎましょう！ いつまた攻撃があるか……」

「少し待て」

「矢口さん！」

部下の制止をふりきって、男はポップ子の後ろに駆け寄った。

彼の名は、矢口蘭堂。

巨大不明生物特設災害対策本部（巨災対）事務局長。

衆議院議員、矢口蘭堂である。

「車に乗ってください。避難所まで送ります。

さあ！」

矢口蘭堂につかまれた手を、ポップ子は、力まかせに振りほどいた。

ポップ子は両手の拳を地面に叩きつけ、叫ぶ。

「ゴジラウアア、ーッ！」

涙をぬぐい捨て。

怒りを目に宿し。

ポップ子はふたたび、立ち上がった。

「覚えてろよゴジラ……」

地べたを這い

ドロ水すすってでも」

頭上の白い影を見上げ、野獣のように中指勃てる。

「お前の前にもどってきてやる!!」

（つづく）

■次回予告■

私、星降そそぐ！

今度のステージは地下都市アンバークラウン！

はりきって現地入りした私たちを待っていたのは、やる気のない現地スタッフさん。

ちよっとお、マジメにやってよおー（汗）
もう！ こうなったら、私たちの歌でスタッフのみんなを動かすし
かない！

次回、

“星色ガールドロップ project—P”

第3星「めんどろは、お嫌い？」

来週も、恋にオーバードロップ！

3. 新・ゴジラ

ポプ子、植木鉢のふたばに水やりをしている。
ふたばがしやべった。

「質が低い！」

読むに耐えない！

この小説はクソ！」

だが、ポプ子にはこやかだ。

「ありがとう♡ ありがとう♡」

ピピ美が来た。

ポプ子のしていることを、不思議そうにのぞきこむ。

「なにしとん」

「アンチの芽に “ありがとう” と声をかけるとすくすく伸びるんだよ」

「伸ばしてどうする」

「食い物にする」

ピピ美は腕を組み、力強くうなずいた。

「惚れ直したわ」

ポプテピピック

POP TEAM EPIC

作：闇鴉慎

東京都立川市

立川災害対策本部予備施設にて。

矢口蘭堂——巨災対事務局長あらため、巨大不明生物統合対策本部
副本部長、兼、特命担当大臣（巨大不明生物防災）。

矢口蘭堂が、山積みになった決裁を片付けていると、巨災対のメン
バーがプリントアウトの束を持って駆け込んできた。

森文哉——厚生労働省医政局研究開発振興課長（医系技官）。

「ゴジラの現在地が分かりました！」

それを聞くや、その場の全員が浮足立ち、群がってきた。長机に置かれたプリントアウトを大勢でのぞき込む。

そこには、解像度の悪いほとんど真つ暗な写真が印刷されていた。ただ、画面の中央に白くボヤけた六角形の板のようなものが見える。

矢口蘭堂、眉間にシワを寄せる。

「これは……なんだ？」

彼の隣からひよっこり顔を出した尾頭ヒロミ——環境省自然環境局野生生物課長補佐——が、ぼそりつつぶやく。

「……宇宙空間」

森文哉がうなずく。

「東京都心から原因不明のワープをしたゴジラは月面に出現。

月を破碎した後、そのまま月軌道付近を周回している」

「じゃあ……この六角形が、ゴジラの新形態か」

「概算で1辺50 km、総面積約6500平方km。東京都の3倍以上の範囲に薄く展開しているものと推測される」

「でかい！」

「どうしてこんな形になったんだ？」

「なんだか傘みたいですね」

「宇宙で雨は降らんだろう」

「じゃ日傘かな」

一同、乾いた笑い。

「日傘……」

間邦夫——国立城北大学大学院生物圏科学研究科准教授——が、口元で、ポン、と手のひらを合わせる。

「……そうか。太陽帆たいようはんだ」

「なんですそれ？」

「宇宙空間に鏡を展開して太陽光を反射し、その反作用で推力を得る装置だ」

「宇宙の帆船ってわけか」

「こんな巨大な帆が、よく崩壊せずにもってるな」

「必要と見積もられる引っ張り強度と靱性から考えて、カーボンナノチューブの支柱に有機高分子フィルム素材の鏡面膜を張ったものと思われる。」

体内に元素変換機能を有するゴジラならこの程度の変態はやつてのけるだろう。

空気も水もない宇宙空間では原子の補充もできず生体原子炉の活動にも限界があるが、この方法なら推進剤なしで軌道を遷移し、地球に帰還することが可能だ。

あらたな極限環境に投げ出されることでゴジラの形態変化が促進されてしまったんだっ……」

「つまり……まったく未知の、ゴジラ第五形態……!」

一同、息を飲む。

ゴジラは消えたかに思われた。だが、まだ戦いは終わっていないかったのだ。

「……問題は、ゴジラがいつ地球に到着するかだな」

「至急、全国の天文学系研究室に軌道計算を依頼します!」

「宇宙にいるなら核ミサイルを撃ち込んでもよいのでは?」

「熱媒体となる空気の存在しない宇宙空間では核爆弾の破壊力は著しく低下する。」

直撃させられればまだしもだが、ゴジラの軌道を正確に読むのは困難だな」

「軌道上での核爆発は地上の広範囲にEMPによる障害を引き起こす恐れもあります」

「そもそもロケット打ち上げ準備が間に合うかどうか」

「しかし米軍に打診する価値はありますね」

「よし。核兵器使用は政治的な問題が絡む。私から赤坂官房長官を通じて首相に話をあげてみよう」

「ゴジラの形態変化は不安だが、これで少し時間が稼げたということだ。この隙に矢口プランを実行レベルまで推し進めるべきだな」

安田龍彦——文部科学省研究振興局基礎研究振興課長——が、手をあげた。

「提案です。」

ゴジラと戦っていたあの少女を、民間の協力者として迎えられませんか？」

一同、しんと静まり返る。

安田龍彦、不思議そうにあたりを見回す。

「あれっ。僕、空気読めてなかったです？」

「いや……ちよつとあの子のことは……自分の中で整理がついてなくてな」

「自衛隊を蹴散らした怪物を相手に互角に渡り合っていましたよね……」

「とういか、手からビームとか出てなかったか？」

「あたりまえのように空飛んでましたよ」

「なんなんですかね、あの子」

「なんか住んでる世界違いますよね……」

「矢口さんは直接話したんでしょう？」

「ああ。名前は確か……」

ポプ子。

そう、ポプ子と言ったか。

……まあ、人間不信な子だったよ」

袖原泰司——防衛省統合幕僚監部防衛計画部防衛課長。

「映像を分析したが、ポプ子には少なくとも戦車大隊レベルの戦力が見込める。」

作戦に組み込めるなら大歓迎だが」

「頼んでみましょう」

「いや待て。現役中学生を働かせるのは労基法上問題があるぞ」

「15歳未満の労働には労働基準監督署長の許可、勉強に差し支えない旨の学校長による証明、及び親権者の同意書が必要です」

(労働基準法第56条、57条)

「親とかいるのかな……」

「いないわけではない……はずだが……」

「午後8時から翌午前5時までの深夜労働もさせられませんし、労使協定による残業時間や休日勤務などの例外も認められません」

(労働基準法第61条、第60条)

「爆発物や有害ガス、有害放射線などの危険をともしなう業務に就かせることもできないだろう」

(労働基準法第62条)

「……そもそもの話をしているか？

子供に戦争をさせたくはないぞ、私は」

一同、再び沈黙。

矢口蘭堂、議論を黙って聞いていたが、ここで口を開いた。

「私は彼女の自由意志に任せたい」

「矢口さん……」

「私は彼女の慟哭を聞いた。」

彼女はたったひとりの親友を喪つたらしい。

そのうえで、彼女はゴジラへの闘争心をむき出しにしていた。

今の彼女には、闘うべき相手が必要なのだと思う。

だからそれを認めてやりたいんだ。

……大人として、褒められた考えではないかもしれないが。

責任は私が取る」

「まあ、矢口さんがそうおっしゃるなら」

「ではみんな、ポップ子さんについては労基法の抜け道を探るのと特例法制定の両面から立案してくれ。」

「それと並行して彼女の意味確認と交渉を行う」

「分かりました」

「で、ポップ子は今どこにいるんです?」

矢口蘭堂はうなずいた。

「惑星アウチーだ」

O u c h i e r t o .

「……どこですって?」

「惑星アウチー。」

銀河系未知領域の。

会いたい人がいるんだそうだ」

「そう……ですかあ……」

*

銀河系、未知領域。

惑星アウチー。

一面の海に、ポツリと浮かぶ岩塊のような島。

そこに一台の、薄い箱型のスペースシップが降りた。

ミトミヤス・ファミコン号だ。

ファミコン号から出てきたのは、ポップ子だった。

彼女はこの島に、ある人物を探し求めて来たのだった。

島の果ての、崖の上に、その人物はいた。

近づいてきたポップ子の気配を読み取り、その人物が——老年の男が振り返る。

そう。

彼こそが打倒ゴジラの鍵を握る男——空歩男。そらあるお
人呼んで——ジエド（以下検閲削除）

（つづく）

■次回予告■

私、星降そそぐ！

信じられない！　せつかく助け出した現地スタッフさんがニセモノだったなんて！

今度こそだまされないんだから！

と、気合いを入れる私たちの前に現れたピンク色した謎の影！
いったい、あなた何者なの!?

次回、

“星色ガールドロップ　project—P”

第4星「第4の星、それはコーラルスター」

来週も、恋にオーバードロップ！

エピソード4 / 新たなるポプ子

A bit time ago in a galaxy close,
close at hand...:

EPISODE IV

ANEW POP

It is a period of Kaiju war.

SDF Joint Task Force, striking

from Asama Jintaba base, have los

t

their first battle against

the unidentified Giganitic

Creature: Godzilla.

During the battle, Pipimi,

a junior high school student,

achieved a feat: Godzilla

temporarily to the Lunar orbit,

at the sacrifice of her own li

fe.

Her best friend Popko hurries

to the planet Ouch—To aboard h

er

stareship to see the old JD

master, who can train her

enough to get revenge on
Godzilla and restore peace
to the galaxy...

*

銀河系未知領域——惑星アウチー。

その中にある、絶海の孤島にて。

年老いた男が、崖っぷちに立っている。

彼は、公爵・空歩男。

かつて銀河系を救った伝説のJDマスターであり、数々の女子大生を育ててきた人物だ。

彼に会うなり、ポップ子は顔面血管むき出しにした。

『力』^{チカラ} 教えやオツラーン！」

空歩男、沈黙。

ポップ子、意外に冷静。

「ほう、だんまりか」

ポップ子はマツキー（極太）を取り出し、空歩男の背中に黒いマウスの絵を描いた。

そして電話をかける。

「もしもし、デイ（検閲削除）？」

「やめろ!!!」

空歩男は非常に焦ってポップ子を止めた。

「ただでさえ今回はグレイゾーンなのだから恐ろしいマネはつつしむように」

ポップ子はスツと手を伸ばして要求した。

『チカラ』

スカイウォークマン

空歩 男は背を向ける。

「JDになるには、まず高校を卒業しなくては。

お前には、歳も力も足りないな」

「でも今なりたい！」

ポプ子は、短い足で地面を踏み割るようにして、スカイウォークマン空歩 男とにらみ合った。

スカイウォークマン

空歩 男は、ポプ子の決意のまなざしを見て、

「……ついて来なさい」

*

連れて行かれたところは、洞窟の中だった。

広い空間の真ん中に、大きな穴が空いていて、その下には黒黒とした水面が見える。

水面がバシヤリと波打った。

どうやら水の中にサメがいるらしい。

スカイウォークマン

空歩 男。

(てきとうに恐ろしい課題を与えてやれば、あきらめるだろう)

と想着て、笑いながら、

「この中に飛び込んで、あのサメに打ち勝ったなら、『チカラ』を教えてやる……」

バシヤーン。

「本当に飛び込むやつがあるか!!」

スカイウォークマン

空歩 男が大慌てで穴のそばに駆け寄る。

見下ろしてみると、音もなく、水面は静かに波紋を立てているだけだ。

しばらくして、

ザバア!!

サメとともに、ポプ子が水面から飛び上がった!

ポプ子とサメは、勢い余って水の外に飛び出てしまった。
どちらも傷だらけだ。

ポプ子は、ピチピチ跳ねているサメに手を伸ばす。

「強かったぜ、お前……!」

サメがヒレを差し出す。

「フ……! お前もな……!」

ふたりは固く握手を交わした。

その姿を見て、スカイウォークマン 空歩 男は、冷や汗を浮かべていた。

(駄目だこいつ……早くなんとかしないと……)

スカイウォークマン 空歩 男は、ポプ子の、目的のためなら手段を選ばない暴走ぶりに、
チカラ 力の暗黒面の匂いをかぎとったのだ。

放っておくと、ポプ子は暗黒面に堕ちるかもしれない。

その前に自分が指導したほうがいい、と考えを改めた。

「ポプ子よ。

チカラ 『力』を得るといふことは、オトナになるといふことだ。

修行を終え、ゴジラを倒したとしても、そのときお前は、今のお前とは違う別のなにかになっているだろう。

それでもいいのか?」

ポプ子は迷わず答えた。

「OH YEAH」

スカイウォークマン 空歩 男はうなずいた。

「よろしい。

——さあ、レッスンを始めよう」

*

というわけで、ポップ子は「力」^{チカラ}の修行を開始した。
このあとしばらく地味な修行シーンが続きます。

その間ヒマなので

みなさまのために
こんな小説をご用意しました。

*

新コーナー

ボブネミミツミ

作：A C 倍
アイマードコアばい
アイマードコア

「今日も酷い天気」

ポップ子の指が四層投影操作盤^{クアトロコンソール}の宇宙を奔る^{はし}。マイクロ秒単位の
静観探査^{スキャンモード}が全身の障害を洗い出し、容赦のないレッドアラートの嵐と
して彼女の眼前に投影する。A P 1 3 5 7、
W G E M G 5 0 0 / E 残弾3掃射分、ジェネレータ及び超電導サイク
ルコンデンサに深刻な損傷、おまけに外は猛烈な強酸の雨——

あらゆる情報が戦闘継続の困難を訴えていたが、それに対するポプ
子の解釈はこうだ。

——いいね。あと40秒は戦える。

嬉しそうに舌なめずりし、同時に胸の高鳴りを努めて抑え、ポップ子
はジッとモニタを見つめた。足元から順に舐め回すように丁寧な——
軽量四脚の優美な曲線、コアの接続部が示す官能的くびれ、そして
凶悪な腕部内蔵ガトリングガン^{A W I G T 2 0 0}のそそり立つさまを。

傭兵^{レイヴン}。蒼い四脚 A C の駆り手。ポップ子の同業——つまりは敵だ。

あの蒼いの——仮に《ブルー》と呼ぼう——が何の目的でここに来

たかは知る由もない。ポプ子がそうしたように、どこかの企業に依頼されてムラクモ・ミレニウム社の墜落機から新型強化人間のレシピ・ブックを回収しにきたのか。ムラクモそのものの差し金で証拠隠滅を狙って来たのか。あるいは単にレイヴン同士の戦いに焦がれる戦鬪狂か。

どれであろうが問題ではない。

ポプ子にとって大事なことはただ一つ。こんなに愉しめる相手とは、滅多に逢えないというシンプルな事実。

なら存分に愉しむべきだ。

ポプ子は操作盤コントロールに指を躍らせ、中量二脚AC《レッド》にパーツの分離を命令した。残弾僅かのミサイルポッド、外付けレーザーユニット、冷却オイル、砕けた装甲、みんな要らない。余計なものを切り捨てて、限界ギリギリまで身軽になって、裸を敵に曝け出す。

ACに己そのものを重ね、獣の如くポプ子が吼えた。

「さあ殺ぎ合おう。命の最後の一滴まで！」

「ほおーっ……」

ブルーが口元に笑みを浮かべる。

「あの子はやる気だよ。いいレイヴンだ」

敵の気迫に正面から応じ、ブルーの手が操縦桿をそっと包んだ。

強酸の雨滴が絶え間なく装甲版を叩く中、赤い巨人と、青い蜘蛛は、身じろぎもせず対峙した。

数秒後。

レイヴンたちの集中が、豪雨の唸りを真空の静寂に呑み込んだ。

時が、止まったかの如く、静。

ただ——雨粒の一滴のみが、装甲の尖った先端に伝い降り——落ちる。

《レッド》が走る！ 肉薄までミリ秒。超音速で繰り出されたレーザーブレードの斬撃が《ブルー》のコアに襲い掛かる。だが瞬時、青い装甲板がブレて見え、気付いたときには敵は背後。

——速ッ！

ゾツとする死の予感と爆発しそうな興奮を同時に堪能しつつポプ

子は操縦桿を薙ぎ倒す。《ブルー》の腕からばら撒かれた高速徹甲弾の嵐を人間離れした超反応で回避して、振り向きざまに反撃の機銃掃射をくれてやる。

だが、それこそ《ブルー》の狙いだったと気付いたときにはもう遅かった。

ポップ子の機銃が火を噴いた瞬間、その銃口に寸分もズレず《ブルー》の弾が食い込んだ。行き場を失くしたプラズマ弾が銃の内部で炸裂し、《レッド》の右腕ごと碎け散る。

《ブルー》の銃弾はポップ子が旋回するより前に放たれていた。つまり敵はポップ子の動きを予測したのだ。1インチの狂いさえなく！

——こいつバケモノだ！

「……からー！」

ポップ子の脚がペダルを踏みつけ、転倒しかけの《レッド》が踏み止まる。

「面白いッ!!」

《レッド》が不可解な動きで腕を振る。左腕のレーザーブレードから光が溢れ、三日月型の光波となって《ブルー》を襲う。ブレード光波！ 発振器から出力される低速レーザー刃を本体から切り離して射出する技術。理論上は可能とされるが、実現するには神懸かり的な操作精度を要求される異端の業だ。

さすがにこれは予測できなかったか、《ブルー》の左腕が肩のキャノンもろとも両断される。《ブルー》の機体はその反動で釘付けになる。この機を逃さずポップ子はフルブーストで突進した。迎撃に放たれる《ブルー》の銃弾を針の穴を通す機動で潜り抜け、逃げ回る《ブルー》に絡みつくように追い継り、一瞬、ほんの一瞬の好機を探る。

奴が、次に隙を見せた時。

——その一瞬でキメてやる！

そして。

その瞬間がやってきた。

《ブルー》の脚が地面の起伏に跳ね上がり、機体制御が僅かにブレる。

ポプ子、必殺の斬撃が飛ぶ。
が。

《ブルー》もこの一瞬を待っていた。我が胸に飛び込んでくるポプ子のコアに、ピタリと機銃の狙いを定める。

ポプ子の脳裏に浮かぶ問い――

――征くか!? 退くか!?

答えはひとつ。

「どおおおおおおりやあああああああああッ!!!」

赤の剣と青の銃火。ふたつの光が、ひとつに交わり――!

弾け。
そして――静かになった。

嘘のような静謐の中、《レッド》のkokopitt・ハッチが開き、封を開けたパウチ・バックから煮つ転がしが滑り出るように、ポプ子の上半身が飛び出した。あまりの熱気に居てもたつてもいられず、邪魔つけない保護ヘルメットを脱ぎ捨てる。

「だはアッ! つつかれたア……」

外の雨は、いつの間にか止んでいた。 グレートデストラクション 大 破 壊で汚染され尽くした地上の空が、今は、不思議と美しく澄んで見える。

ふと見下ろすと、《ブルー》――かぐざ 摺座した四脚型ACの姿がそこにある。ポプ子のブレードで脚部とコアの継ぎ目を半ばまで引き裂かれてなお、そのフォルムは彫刻めいた美しさを保っていた。

《ブルー》のハッチが開く。パイロットのレイヴンが、姿を現す。

「やるじゃないか」

と、レイヴンが言う。

ヘルメットを脱いだその姿に、ポプ子は、見惚れた。

青い、剣のように真っ直ぐな髪。面長の顔だち。氷を思わせる冴えた眼差し。その目に見つめられ、ポプ子は心臓を射抜かれたように放心した。

「本気でやって負けるとは思わなかったよ」

何と答えたものだろうか? ポプ子は頭の中にたくさんの回答選択肢を並べあげ、素早くひとつひとつ検討し、最終的に、それをみん

な棄ててしまった。結局ポプ子の口から出たのは、なんとなく頭に浮かんだ言葉——彼女の生の言葉そのものだった。

「きつと、今日は私の日なんだよ」

青い少女が肩をすくめる。

「じゃあ、明日は？」

「私たちふたりの日」

その答えに、青い少女は一瞬、呆気にとられた表情を浮かべ、それから、笑い出した。嬉しくなって、ポプ子も笑った。荒廃した地上——戦争が終わった荒野——誰もいないふたりだけの場所、ふたりだけの時間。

ひとしきり笑い尽くした後、どちらかが、問いを発した。

「ねえ、聞かせてよ。」

君の名は——？」

こうして、その日の戦いは終わった。

意気投合したふたりは連れ立って街に戻り、そのまま、コンビを組んで活動を始めることにした。

バディ・レイヴン、ポプ子とピピ美。ふたりは後に、アイザック・シティ地下都市全域

に悪名を轟かすことになるのだが——

それはまた、別の話。

(つづく)

■次回予告■

私、星降そそぐ！

ついに明らかにになったウエンスデイ・プロダクションの、強化アイドル製造計画——プロジェクトP！

全国の女の子たちを機械と融合させてアイドルにしちゃうなんて！

そんなこと許せない！

でも、計画を阻止するためのゲリラライブに傭兵アイドルが乱入！
もーっ！ 邪魔しないで！

……って思ったら、え？ 違う？

やだ！ だめよ！ 私には大地君というひとが……！

次回、

“星色ガールドロップ project—P”

第5星「お前は俺だけのものだ！」

来週も、恋にオーバードロップ！

5. ゴジラ vs ポプ子 (前編)

「ゴジラ vs ポプ子」が、日間ランキング最高24位を取りました。

(2018年4月18日現在)

ポプ子はゴキゲンだ。

「とってまうわー。」

とってまうわー。

完全に日間1位てっぺんとる流れやわコレ〜!」

その微笑ましい姿を、物陰から、ピピ美が見守っている。

「フフ……」

*

〜3日前〜

ピピ美、音もなく読者の背後に出現した。

「貴様……読んだな？」

読者ビビる。

「アツハイ」

ピピ美が距離を詰める。

「『10点』だ……わかるな？」

「ハ……ハイッ……」

距離を詰める。

「『感想』も入れろ……いいな？」

「ヒ……ハイッ……!」

もう零距离だ。

「そしてなにより……」

『推薦』を書け。

『推薦』を書け!!」

「ヒイイツ!!」

*

ピピ美は回想を終えた。

ポプ子が駆け寄ってくる。

「ねえねえ!

日間^{てっぺん}1位とれるかな!?

日間^{てっぺん}1位とれるかな!?

ピピ美、力強く拳を握って見せた。

「絶対^{ぜってー}とれる」

「ヤッター!」

ポプテピピック

作：闇鴉慎

地球。

日本国、東京都心——であつた場所。

今ではもう、見わたすかぎりの荒野でしかない。

その上空に、フラフラと蛇行する宇宙船の姿がある。

「わ!

わっ。

あれ!

ちよつと!

やっだくくくつ。

うっそおくくつ。

いやくくん!

でくくつ!」

宇宙船が墜落した。

墜落地点。

土砂の中から、ボコツ、とポプ子がい出てくる。

「やれやれ……」

あと少しいつていうところなのに。あいつめ……

でも」

ポプ子が見上げる。

地球に接近し、今では肉眼でもとらえられるまでになった、白い六角形の傘。

「帰ってきたぞ——ゴジラー！」

*

日本全域で、人々は息を潜めていた。

テレビから、動画サイトから、防災無線から、くちぐちに警告がもたらされる。

『今夜、午前0時より未明にかけて、巨大不明生物ゴジラへの核攻撃にもなつて、全国で大規模な電波障害があります。』

皆様のご協力をお願いします。

なお、この攻撃による地上への放射能汚染はありません。
繰り返します。

今夜、午前0時より未明にかけて……』

一方。

地上のゴジラ墜落予想地点。

張りつめた静寂の中、自衛隊と米軍が展開している。

万が一、核攻撃が失敗したときに備えて、待機しているのだ。

さらに。

立川災害対策本部予備施設では、矢口蘭堂以下、巨災対メンバーたちが、息を飲んでモニタの映像に見入っている。

「ピピ美さんの犠牲で得た、一回きりのチャンスだ。
頼む……これで決まってくれ……！」

*

地上から遠く離れた、宇宙の暗闇の中に――
白く長い円筒の姿がある。
核弾頭を搭載したロケットだ。

雑音混じりのオペレーションが聞こえる。

「――ポッド2☒ 不帰投点を通過。エリア88に侵入」

「了解。これよりトモダチ作戦を開始」

「了解。ポッド2☒ 作戦最終軌道に投入開始。

減速行動に移る」

「第3段、全エンジンを点火。燃烧を開始」
燃烧。

「キヤスター30、燃烧終了。減速を開始」

「第3段、ブースターユニットをジェットソン」

「分離を確認。電装系をチェック。異常なし――」

淡々と、しかし確実に、核弾頭は計算どおりの軌道遷移をこなして
いく。

その結果、ついに、搭載されたカメラに、ゴジラの姿が映し出され
た。

「目標物発見！」

白い巨大な日傘のような姿になったゴジラ。

冷静なオペレーションの中に、わずかな緊張の色が交じる。

「ポッド2☒ 交差軌道への遷移スタート」

核弾頭がゴジラへ吸い込まれるように近付いていく。

綿密な計算と、確かな技術力によって、核弾頭はゴジラに直撃する
軌道に乗ったのだ。

「ランデブーまで10秒。

……8……7……」

そのとき。

オペレーターが悲鳴を上げた。

「目標に異常発生！」

突如、ゴジラの白い傘が前面に向かって折りたたまれ、弾けた。傘を前に向かって爆破、分離したのだ。

その反作用によつて、ゴジラ本体に強烈な減速がかかる。

つまり――

「目標物の軌道が変わります！」

「2☒ 予定座標に到達するもランデブー失敗！」

「核弾頭起爆！」

「了解。起爆しました！」

*

地上。

日本中の人々が、不安げに上を見上げている。

夜空が、猛烈な放射線によるオーロラで血赤色に染まった。

そして、血染めの空を突き破るようにして、黒い影が落ちてくる。

ゴジラだ。

直前で軌道を変えることにより、核弾頭の直撃を回避したのだ。

「核攻撃失敗！」

ゴジラの軌道が変わった！

落下予測地点の修正は間に合わない。各自対応を……」

その通信が終わるより早く、すさまじい轟音と振動が日本列島を揺るがした。

落下地点は伊豆半島芦ノ湖周辺。

落下の衝撃で山がひとつ消し飛び、大量の岩の雨となって周囲を襲った。

なすすべもなく、周辺の街が土砂に押し潰されていく。

米軍と自衛隊はすぐさま行動を開始した。

核攻撃が失敗した場合の代替案は、敵射程外から無人機とミサイルによる飽和攻撃だ。

こんなものではゴジラを倒せない。

それは先の戦闘で証明済み。

だが、エネルギーを使い果たさせればしばらく動きを止めることはできるはずだ。

無数の飛行物がゴジラに殺到し、その全てが放射線流によって撃墜された。

攻撃は休みなく、夜通し続けられた。

それでもゴジラの足は止まらない。

山を踏み分け、街をもみ潰し、攻撃をもともせず、再び東京へ戻らんと歩き続ける。

いよいよ、米軍の物量さえ尽きようとした——そのとき。

*

ゴジラの進路の先。

高いビルの屋上。

そこに、少女の影が現れた。

ポプ子だ！

——四界の闇を統べる王

汝の欠片の縁に従い

汝ら全員の力もて

我にさらなる魔力を与えよ

——黄昏よりも昏きもの

血の流れより紅あかきもの
時の流れに埋うずもれし
偉大な汝の名において
我ここに 闇に誓わん
我等が前に立ち塞がりし
全ての愚かなるものに
我と汝が力もて
等しく滅びを与えんことを

ドラグ・スレイフ
「竜破斬！」

赤い閃光が少女の手から放たれ、ゴジラに収束する。
次の瞬間。

凄まじい大爆発がゴジラを飲み込んだ！
かつての術とは比べ物にならない威力……
これが、修行を終えたポップ子の力なのだ。

だが、ゴジラは死んではない。
炎の中で、もがき苦しみながら、それでもポップ子に向かって進んでくる。

「そろそろやろ。」

この程度で倒せるとは思ってたへんわ」
ククツ、とポップ子が嬉しそうに笑う。
こうでなければ、殺やりがいがない。

バシツ!!

ポップ子が、中指た勃てる。

「来いよゴジラ！」

遠慮なんか捨ててかかってこい!!」

それに応えるかのように。

ゴジラの咆哮が、天地を引き裂かんばかりに響き渡った!!

(つづく)

■次回予告■

私、星降そそぐ。

信じられない。

ずっと私たちが戦ってきた、傭兵アイドル……

私、あなたの声を知ってる。

あなたの背中も。

あなたのしぐさも。

私、みんな知ってる!

そんな……まさか……

私たちの敵が、あなただったなんて!

次回、

“星色ガールドロップ project-P”

第6星「大地、堕ちた先に」

来週も、恋に……ドロップなんて、できないよお!

6. ゴジラ VS ポプ子（後編）

ポプ子が走ってくる。

「見て見てー！」

日間ランキング10位！

日間ランキング（加点式）6位！

週間ランキング（その他原作）3位ー！」

私は、拍手でそれを迎え入れる。

「オー、マジエースティーツク」

ポプ子はポプ子だ。

夢の中でさえも。

でも——

（映像の乱れ）

——夢？

（認識の不整）

ハイ！は？

（記憶の混乱）

今、ポプ子を迎え入れた人——これは誰？

私………？

私は………誰？

ポップ縹ピヴ縹斐ヤ縹ッ

作：闇鴉慎

ゴジラとポップ子の決戦が始まった。

ゴジラの口に青白い光が溜まり、放射線流が放たれる。

ポップ子が飛ぶ。

ビルから飛び降り、壁を蹴って真下に駆け下り、放射線流の着弾点を引き離す。

放射線流がポップ子の動きを猛追し、彼女の背後のビルを、アメのよううに融かして粉碎していく。

放射線流がポップ子に追いつく。

もはや逃げられない——と思われた、その時。

クイックブースト！

ドヒヤア！！

ポップ子の背から謎の無害な粒子があふれ出て、一瞬にして、彼女の身体を超音速まで加速した！

加速時間はわずか0.3秒。

最高速度は実に4000km/h！

恐るべき速度のために、ポップ子の身体がかき消えたかに見えた。

遠目に見ていたゴジラにさえその動きは追いきれず、放射線流は見当違いの方向に流れていく。

ドヒヤア！！ ドヒヤア！！

ポップ子は、連続クイックブーストで周囲の障害物をなぎ倒しながら、息つく暇も与えぬままに、ゴジラの足元まで肉薄した。

そして、

「光よー」

ポップ子の咆哮に答え、彼女の手の中の柄つかから、光が棒状に伸びてい

く。

光の釘バット——ライトセイバット光 剣だ。

ポップ子の斬撃がゴジラの皮膚を切り裂く。

戦車砲の直撃さえ無傷で耐えきった、あの分厚い皮膚をだ。

ゴジラが痛みのために絶叫し、足を持ち上げ、ポップ子を踏み潰しにかかる。

しかしポップ子はすぐさまクイックブースト。

超音速でその場を離れ、ゴジラの軸足の方へ移動する。

「けずり取ってやるッ！」

『ザ・ハンド』手！』

ガオン!!

ゴジラの足の下^の地面が、『けずり取られ』て消滅したッ!!

片足を上げた状態で、体重をかけていた地面が無くなったのだ。

当然、ゴジラはまともにバランスを崩した。

その巨体が災いして、一度崩れた体勢を立て直すことは——不可能！

ゴジラが横倒しに倒れる。

倒れながらゴジラは、苦し紛れに放射線流を撃つ。

しかしそんなものが、今のポップ子に当たるはずがない。

ポップ子は舞空術で上空に舞い上がりながら、クイックブーストをたくみに混ぜて、対空射撃の間をくぐり抜けていく。

眼下にゴジラを見下ろせるところまで来ると、右手を下に突き出した。

「くらえ!!」

こいつが超^{スーパー}ポプ子の

ビッグ・バン・アタックだ!!!」

ズアオツ!!!

すさまじい大爆発が巻き起こり、周囲の地形ごと完全にゴジラを飲み込んだ!

爆発の光が、空を昼間のように明るく染め上げる。

あたりには煙がもうもうと立ち込め、1m先を見通すこともできない。

ポプ子は空中にジツとどまったまま、ゴジラのいた方をにらみ続けていた。

なにしろ、あのゴジラだ。

ダメージを与えた自信はあるが、油断できる相手ではない。

そのとき、ポプ子のポケットの中でスマホが鳴り出した。

誰やこんなときに、と思いながら電話に出る。

『もしもし! ポプ子さんですね。』

私は矢口。巨災対の矢口蘭堂です』

「なんやお前」

『ポプ子さんのおかげでゴジラの動きを止められました。』

我々には、ゴジラを凍結させる薬品の用意があります。あとは任せてください』

「ア、ア、ン!?!」

ちら、と下を見ると、たくさんのコンクリートポンプ車が、ゴジラに向かって走っていた。

「手出ししてんじゃねええええ!!」

『落ち着いて! 味方です!』

「あれは私の獲物だアアア!!」

そこでポップ子、ハッと気づいた。

ゴジラが身動きして、コンクリートポンプ車に放射線流を撃とうとしている!

このままではポンプ車が危ない。

「チィー!」

ポップ子は舌打ちしながら『ザ・ハンド^手』を発動する。

ガオオン!

コンクリートポンプ車の前の空間をけずり取り、放射線流の向きを自分の方に引き寄せる。

放射線流がポップ子を直撃した。

だが、ポップ子の周囲には、謎の無害な粒子のバリア——プライマルアーマーが展開されている。

プライマルアーマーは、ギリギリのところまで放射線流を防ぎきった。

「フウー……」

『ポップ子さん、危険だ!』

いったん下がってください!』

「引っこんどれ!」

ワイはアイツを殺^やらなあかん……

殺^やつとかな、氣イすまへんのや!」

スマホを投げ捨て、ポップ子は一直線にゴジラへ飛んだ。

飛びながら呪文を詠唱する。

ゴジラはあれだけの攻撃にも耐えた。

もはや手段を選んではいられない。

重破斬。^{ギガ・スレイフ}

もし制御に失敗すれば、巻きぞえで世界さえ滅ぼしかねない——最凶最悪の必殺呪文でケリをつける！

——闇よりもなお昏きもの

夜よりもなお深きもの

混沌の海にたゆたいし

金色^{こんじき}なりし闇の王——

と。

呪文の途中で、ポップ子は眉をひそめた。

転んだゴジラ。

その尻尾の先端あたりで、何か小さなものが動いたように見えたのだ。

さらに。

——撃つな。

誰かの声が、頭の中に響いた——気がした。

ポップ子は頭を振って、よけいな雑念を追い払った。

ただでさえ制御の難しい呪文なのだ。気を散らしている余裕はない。

——我ここに 汝に願う

我ここに汝に誓う

我が前に立ち塞がりし

すべての愚かなるものに

我と汝が力もて

等しく滅びを与えんことを！

「重破^{ギガ・スレ}……！」

次の瞬間。

「撃つなって」

ゴガアアア!!

突如、ポプ子の首の後ろに、ハンマーでぶん殴られたのような衝撃が走った!

いや、ハンマーどころではない。

ポプ子のプライマルアーマーさえ貫き、ポプ子の身体を上空から地面に叩きつけるほどの威力。

ポプ子は一直線に落下し、正面から地面にめり込んだ。

周囲にクレーターができる。

激痛のために、呼吸さえ一瞬止まってしまう。

——なんだ!?

ポプ子、痛みをこらえて立ち上がり、上空を見上げる。

そして、言葉を失った。

少女が、そこにいた。

手刀を首の前に構えた少女。

いまのが、ただの手刀だったというのか!?

いや、それよりも。

「まさか……君は……!」

空中の少女が、おでこに指を当てる。

ピシユン!

と彼女の姿が消え、今度はゴジラの身体の上に現れる。

瞬間移動。あの子の得意技だ。

まちがいない。

見まちがえるはずがない。

ポプ子の目に。

じわり、と。

涙がにじみ出た。

生きてたんだ。

無事だったんだ。

生きていてくれたんだ！

「ピピ美ちゃんっ!!!」

そう、それはピピ美だった！

ポプ子がピピ美の胸に飛び込んでいく。

が。

「か——っ!!!」

ピピ美の口から青白い光線が放たれた。

放射線流だ!!

ポプ子はまともにそれを浴びた。

さきほどの手刀でプライマルアーマーも破られたばかり。

ろくに防御もできないまま、ポプ子は身体を焼かれながら、背後に吹き飛ばされた。

全身焼け焦げ、倒れたポプ子。

震えながら顔を上げ、苦しげにうったえかける。

「ピピ美ちゃん……」

どうして……!?!」

ポプ子の見る前で、ゴジラがゆっくりと立ち上がる。

その手のひらの上に、ピピ美は静かに立っている。
長い藍色の髪が、夜風に流され、顔にまわりつく。
ピピ美、それを優雅になでつけて——冷たく一言。

「——悪堕ちしたわ」

(つづく)

■次回予告■

私は何か・・・されたようだ・・・
・・・人間でなくなってしまった・・・
ムラクモを・・・列車を・・・襲撃したい・・・
これ以上手術を・・・
解放・・・さりたい・・・
協力してくれ・・・

7. 最狂の敵

ゴジラの身体が、星空を突き刺しそうなほど高く、そびえ立っている。

その手のひらの上には、ピピ美。

ポプ子は、地べたにはいつくばって、うるんだ目で彼女を見上げている。

「ピピ美ちゃん……」

ポプ子は舞空術で飛び上がった。

「友情パワーでよみがえってーっ！」

まっすぐにピピ美の胸に飛びこんでいくポプ子。

だが、ピピ美は、ポプ子の頬をはり倒した。

「アッ！」

ポプ子は流星のようにはじき落とされ、地面にバウンドする。

ピピ美が瞬間移動で追いつき、ポプ子の腹へパンチをぶち込む。

拳が、背中まで貫通するのではないかと思うほどめりこむ。

ポプ子が苦しげにうめいた。

さらにピピ美の回し蹴り。

ポプ子は数回地面に跳ねながら吹き飛ばされる。

ピピ美が大きく口を開け、その中に青白い光を灯した。

ふたたび、ピピ美の口から放射線流が発射され、ポプ子に追い打ちをかける。

爆発がポプ子を飲みこんだ。

……雨が、ふりはじめた。

爆発で巻き上げられた砂ほこりを、雨粒が洗い流していく。

視界が開けると、そこには、焼け焦げたポプ子が、ボロ雑巾のように転がっていた。

「ピピ……ちや……」

もはや息も絶え絶えだ。

地べたを這い、泥水をすすりながら、それでもポップ子は、ピピ美を呼び続けた。

そんなポップ子を、ピピ美は、興味なさげに見下ろしている。

ふと、ピピ美が空を見上げた。

上空に流星のような光のすじが見える。

米国のICBM（大陸間弾道ミサイル）だ！

「……無駄なことを」

ピピ美が、弾丸のように上空に飛び上がる。

「Okay, Let's partyyyyyyyy!!!」

すさまじいスピードで、ほんの数秒のうちにICBMまでたどりつく。

そして、ICBMに手を触れ、瞬間移動した。

行き先は、ワシントンD.C.、ペンシルバニア通り——
大統領官邸。
ホワイトハウス

「How do you like me now?！」

顔面蒼白になった大統領の目の前で。

核が炸裂した！

*

一瞬の後には、ピピ美は日本——ゴジラのもとへ戻っていた。

これでもう、米軍、いやどの軍も、うかつには動けないだろう。

核を撃ち込めば、瞬間移動でそのまま自国に返されるのだ。攻撃のしようがあるまい。

あとは。

ポプ子さえ片付けてしまえば、ゴジラに対抗できるものは、この地球からすべて消滅する。

と、ピピ美の脳天に、戦車砲の砲弾が直撃した。

ピピ美は爆炎を切り裂いて飛び上がり、砲弾の来たほうを眺めた。はるか遠方の山肌から、数えきれないほどの戦車が、荒野と化した斜面を駆け下りてくる。

うつとうしい虫を追い払うような感覚で、ピピ美は口の中に放射線流を準備した。

が、別の方角にエンジンの音を聞きつけて、そちらに目をやった。無人航空機フレデターの群れが飛んできている。

それらが一斉に対戦車ミサイルヘールファイアを発射する。

狙いはゴジラだ。

「チッー」

ピピ美は舌打ちして、放射線流で空を薙ぎ払った。

プレデターとミサイルの群れが、左から右へ次々に爆発四散する。

その隙に、さらに戦車砲が着弾。

かと思えばまたしてもプレデター。

息をつかせぬ波状攻撃——迎撃に追われて、休む暇もない。

——いったい何が目的だ、人間どもよ？

ピピ美は、はたと気づき、ポプ子のほうに目をやった。

いつのまにかポプ子のそばまでたどり着いていた装甲車が、彼女を車内に引っぱり上げている。

——狙いはポプ子か！

ポプ子を逃がせば、また面倒なことになる。

ゴジラ本体への多少のダメージは覚悟のうえで、ポプ子にトドメを刺しておいたほうがよい。

ピピ美はそう判断して、狙いをポップ子に向けた。

しかし、放射線流発射の直前、何者かが上空から飛び降りざまにピピ美を斬りつけた。

ピピ美の身体が、肩から胸にかけて、バツサリと斬られる。

「ぐうっ!？」

ピピ美は、苦痛に声をあげ、大きく飛びのいた。

ヒゲづらの老人が、青い光剣スバッドをぶら下げて、のんびりと立っている。

公爵・空歩男だ。

「君たち、はやく行きたまえ」

空歩男スカイウォークマンが、自衛隊の装甲車にプラプラと手を振る。

「ここは私が引き受ける」

ピピ美と空歩男スカイウォークマンは、にらみあった。

ピピ美が身がまえる。

「避けたつもりだったんだがな。」

まるでどう避けるか分かっていたような太刀筋だった。

それが「力」チカラか」

空歩男スカイウォークマンが、にこりと微笑む。

「すばらしい。すべて間違っている」

ポップ子が装甲車に乗せられ、安全なところに去っていくのを、空歩男は背後に感じていた。

自分はこの戦いから生きて帰れないだろう。

うすうすそう感じながら、空歩男スカイウォークマンは、最後の弟子に心の声で呼びかけた。

——ポプ子よ。

オリジナリティが必要だ。

勝利は、その向こうにある……

ピ。ピ美が来る。

スカイウォークマン
空歩 男が剣を構える。

——オトナになれ、ポプ子！

スパッド
光剣と放射線流がぶつかり合い、閃光の中にふたりの姿は飲まれていった。

*

夜が明けた。

東京都立川市

立川災害対策本部予備施設にて。

矢口蘭堂をはじめ、巨災対のメンバーたちが、山積みになった仕事に追われている。

電話もメールもパンク状態。

新情報が怒涛のように舞い込み、もはや処理しきれないほどだ。

それらを整理・分析して対策を練っていると、外から騒ぎが聞こえてきた。

「離さんかいオリヤー！ イテモータロカワリヤー！」

ポプ子だ。

ドツギヤーン！

ドアを蹴り開けて、ポプ子が飛び込んでくる。

彼女は全身血まみれで、腕には点滴の針が刺さったままだ。

看護師と医師が、3人がかりでタックルして止めようとするが、ポ

プ子はそれを引きずりながら突進をやめない。

なんとという爆発力、なんとという根性、まるで重機関車だツ!!

「ピピ美ちゃんはッ！」

ピピ美ちゃんはどこだアーツ!!」

「いけません！ まだ処置の途中ですツ!!」

「処置だかジョチだか知らんがンなもんしとるヒマあるかいイイー！」

ピピツ……ピミツ……ピピピツピーツ!!」

わめきちらすポプ子の前に、矢口蘭堂が立ちはだかった。

「ポプ子さん、まずは落ち着いて」

「コレが落ち着いてられるかア！」

ピピ美はどこやオーツ!?!」

「今、その話をしていたところです。

各地から情報が集まってきている……あなたも会議に参加しませんか?」

「……………」

ポプ子が黙った。

こういうふうに着いた対応をされるのは、生まれて初めてのことだった。

そのため、どうしていいのかわからず、とまどってしまったのだ。

矢口蘭堂、真面目な顔をして、続ける。

「ただし条件があります。

この場で治療の続きを受けること。

——まあ、妥協案です。

「ここらで手を打ちませんか?」

ポプ子、しばらく、獣のように、フーツ、フーツ、と荒い息をついていたが、やがて大きく深呼吸した。

「……………まあ……………わかった」

と、ポプ子と言ったとたん、時間停止が解除されたかのように、官僚たちが慌ただしく動きだす。

「では席はそちらへ」

「資料一部どうぞ」

「モニタ左からサーベイデータ観測映像報道その他もろもろ」

「飲食セルフ禁煙よろです」

「森さん続きお願いします」

「了解です」

官僚たちの機関砲めいた早口に、ポプ子はすっかり圧倒されてしまった。

モニタに映ったゴジラの映像が、拡大され、ピピ美が大写しになった。

ポプ子はそれを見て、資料の小冊子を握りしめる。コピー用紙に、クチャクチャにシワが寄った。

「じゃ、みんないいか？」

ゴジラ第六形態対策ミーティング、再開するぞ！」

(つづく)

8. 同志

東京都立川市。

立川災害対策本部予備施設にて。

巨災対による、ゴジラ第六形態対策ミーティングは続いていた。

大きなモニタに、ピピ美の姿が映っている。

はるか遠方から観測された映像なので解像度が悪いが、ゴジラの尻尾の先端に身体を半分埋めて、静かに眠っている様子が見て取れる。

ゴジラも休止中のようなのだ。

「これが15分前の映像です。」

ゴジラは依然沈黙、ポプ子さん救出時に足止めしてくれた老人の姿もありません」

「完全に動きが止まったな……」

「おそらく一時的にエネルギーを使い果たし休眠状態になったと思われる」

「現在、戦闘中の映像を分析してエネルギー消費量を推定、活動再開までの時間を算出中です」

「ポプ子との戦闘中、ゴジラの尻尾先端からピピ美が分離、その後はゴジラ本体の活動がほぼ完全に停止した。」

この事実から、ゴジラ第六形態は戦闘能力の大半をピピ美に依存していると考えられる」

「兵器として捉えたときゴジラ最大の欠点はあの巨大な身体そのものだ。」

どれほどの筋力を持つとうとニュートンの法則からは逃れられず、体重が大きくなればなるほど動きは緩慢にならざるを得ない。

だが戦闘能力を小型のユニットにあずけて本体から切り離せば機動性は大幅に向上する」

「超弩級戦艦から、空母と艦載機に変身、つてわけか」

「ポップ子に対抗するために……か？」

「おそろくそうだろう。」

これまでのゴジラの形態変化は基本的に環境変化に対する対応リアクションとして現れてきた。

第四形態の分厚い装甲や放射線流による遠隔攻撃が自衛隊、ひいては米軍による攻撃への対応であったと仮定すれば、ゴジラにとって最大の脅威であったポップ子とピピ美への対抗策をとることは充分考えられる」

「その手段がピピ美の能力を取り込むことだったと？」

「しかしどうやって？」

「月が破壊された時その場にはピピ美さんがいたはずです。」

もし脳が大きな損傷なく残り、細胞が死滅する前に回収されたとすれば……」

「ゴジラは体内で自在に元素を変換し物質を合成できる。ピピ美の肉体を再構成することも可能……か」

「こいつはやっかいだぞ……」

ただでさえバケモノじみてるつてのに、あの子の力まで加わったら……」

一同、沈黙。

そこで、先ほどから沈黙を守っていた立川始（資源エネルギー庁電力・ガス事業部原子力政策課長）が口を開いた。

「いや、これは好機じゃないか？」

一同の視線が集まる。

「ピピ美が攻撃を中止してゴジラの体内に戻ったのはなぜだ？」

「たとえば……エネルギー補給？」

「ゴジラの生体原子炉が人間サイズの肉体に収まるとは考えにくい。

ならピピ美は今、活動に要するエネルギーをゴジラ本体から供給されているんじゃないか？」

「つまりゴジラが充電器クレイドルでピピ美がスマホ、ってわけですね」

「そしてゴジラ第六形態は攻撃機能の大部分を外部デバイスであるピピ美に依存しているわけだから……」

「そうか。ピピ美をゴジラ本体から切り離しエネルギーを枯渇させれば、ゴジラの戦闘能力を大きく削ぎ落とせる！」

「その状態なら矢口プランの実行は容易だ！」

「待て。その場合、切り離されたピピ美はどうなる？」

「ゴジラがピピ美の肉体を忠実に再現したのなら、その構造は人間同様のはずだ。医学的に治療できる可能性は高い」

「肝心の分断方法は？」

「ワシントンを失って米軍は混乱の極み、自衛隊だっていくらも余力は残ってないぞ」

「ひとつだけ残ってる。」

「ピピ美に対抗しうる存在が」

「……なるほどな」

「おいー」

「これは行けるんじゃないか!？」

盛り上がる一同。

その輪から少し外れたところで、ポプ子は腕組みしている。

「あーそーゆーことね。」

完全に理解した」

→わかってない。

矢口蘭堂、ポプ子の前に向かい合った。

「ピピ美さんを助けられるかもしれません」

ポプ子、自分の三倍ほど背丈のある矢口蘭堂の顔を見つめ返した。

今の彼女の目は、いつも他人に向けるような、なんの期待もしない冷めた目ではなかった。

警戒しながらも、歩み寄ろうか迷って踏みとどまる、野良猫のような目だ。

矢口蘭堂が続ける。

「まだ可能性の段階ではない。うまく行くかもわからない。だがやってみる価値はある。

それがゴジラを倒すことにも繋がるでしょう。作戦立案と実行準備は我々がします。

しかし、この作戦を遂行するには、あなたが必要不可欠だ。

ポプ子さん。

ゴジラを倒すため。

ピピ美さんを救うために。

我々に、力を貸してはくれませんか！」

矢口蘭堂が、手を差し伸べる。

ポプ子は――

その手を、握った。

ポプ子 with 巨災対。

ゴジラに立ち向かう最強のチームが、今、ここに産声をあげた！

*

それから。

ゴジラとの決戦に向けて、日本中がたくましく動き出した。ゴジラ凍結に必要な薬剤の追加生産。

作戦立案と綿密な検証。

実行部隊の再編成。

被害者たちへの救済措置と、あらたな避難地域の設定。

および腰となった米国への説得と協力要請。

そして——どうしようもなくなつたときの最後の手段。何発かは瞬間移動で突き返されるのを覚悟のうえで、確実にゴジラ本体を焼き尽くすための核による飽和攻撃準備——

ゴジラ活動再開までの時間は残り少ない。

殺人的なスケジュールのなかで、財前正夫（自衛隊統合幕僚長）は、ゴジラ凍結のための作戦立案を終え、矢口蘭堂に提出した。

矢口蘭堂、その内容を見て満足げにうなづく。

「ありがとうございます。」

無理なスケジュールの中で

財前正夫、硬い表情のなかに、わずかに微笑みを浮かべる。

「礼にはおよびません。仕事ですから」

「では……ゴジラ撃滅計画というのも子供っぽいですから。」

『ポップきちのバクチン大作戦』としましょう」

「分かりました」

*

一方、ポップ子はこの期間ずっと、災害対策本部の屋上で修行を続けていた。

誰にも打ち明けてはいなかった……が。

実は、ピピ美に負けたあの戦い以来、ポップ子は「力^{チカラ}」が使えなくなつていたので。

いや、「力^{チカラ}」だけではない。

クイックブーストも、黒魔術も、エネルギー波も。

パクリネタが、なにも使えなくなつていたので。

師匠、スカイウォークマン空歩男の最後の言葉が蘇る。

——オリジナリティが必要だ。
オトナになれ、ポップ子！

「オリジナルかー。正論だなー。

……いや。

よく考えたらクツクツソむかつく」

と、そこへ。

出撃時間を知らせるサイレンが鳴り響いた。

*

そして。

ポップ子は三度^{みたび}、ゴジラに^{たいじ}対峙した。

今や彼女には。

ビームもない。

魔法もない。

いかなるスーパーパワーもない。

……だが！

「やってやらあよー！

やってやらあよ!!!」

たとえ力のすべてを封じられようと。

己^{からだ}の肉体と。

この釘バットと。

ゴジラめがけて中指^た勃てる、不屈の闘志があれば——充分!!

「行くぞゴジラ……」

これが最後の戦いだ！

そしてピピ美ちゃん!!
君だけは!!
絶対私が救ってみせる!!」

(つづく)

9. バイバイ、ララバイ

新コーナー

ポプネミミツミ

アーマードコアばい

作：A C 倍

ポプ子が走る。ゴジラの足元までわずか数秒。そのままゴジラの身体を蹴って稲妻のように駆け上り、手のひらの上で佇むピピ美の背後へ肉迫する。

「ゴルア!!」

気合とともに振り下ろしたバットは、しかし虚空を割いたのみ。ピピ美の姿は忽然と消え、一瞬の後、ポプ子の耳元にささやき声が届く。「手荒いキスだな」

——ピピ美!

「嫌いじゃないよ♡」

痛打!

ピピ美の蹴りが背中に叩き込まれ、ポプ子は斜め一直線に墜落した。体勢を立て直す暇もなく、ピピ美が瞬間移動で追い付いてくる。とっさにバットで応戦するも、ピピ美は片腕のみで軽々とそれを受け止めてみせた。

ピピ美がにこりと穏やかに微笑む。かつてと全く変わらない優しさで。

「——次は?」

ぞつ、と。

ポプ子の背筋を恐怖が駆け抜けた。

——が。

「負けて……」

いったんバットを引き、

「たまるかアア!!」

連打! ポプ子の小さな身体から繰り出される怒涛のごとき連打。

上下左右斜めに中央、あらゆる方向から打撃が雨あられと繰り出される。あまりの速さにバットの動きを目視することさえ不可能。

しかしピピ美はその全てを腕で、脚で、時には額で、的確に受け止めいなしていく。一打一打でいいいに、さながらポップ子の攻撃性を丸ごと抱擁するようにだ。

「らちがあかない。ならば次の一手。」

ポップ子は腰のうしろに隠し持っていた拳銃ヅエリコ941を引き抜き、抜き打ちにピピ美の脳天めがけてぶっ放した。銃弾40S&Wがピピ美の額に食らいつき、その衝撃で彼女の身体が縦に回転しながら跳ね上がる。

そこへ。

大上段から振り下ろした渾身の釘バットがめりこんだ！

ピピ美の身体が地面に叩きつけられる。さらなる追い打ちをかけるようにポップ子は引き金を引き絞る——

そのポップ子を、横手から鞭のようなものが打ち払った。

まるで鋼の棒で殴りつけられたかのような鈍痛！ 衝撃で手にした拳銃が弾かれ飛んでいく。ポップ子はピピ美の姿を見て、驚きに身をこわばらせた。

尻尾。ピピ美の背後から生えたゴジラそっくりの尻尾が、ポップ子を叩きのめしたのだ。

——ここまでゴジラ化が進んでるのか！

ポップ子の横っ面を再び尻尾が襲う。ポップ子はまともに吹き飛ばされ、地面に数度バウンドした。が、空中で一回転して体勢を立て直し、足を滑らせながら着地する。

「ヤベエ！ 勝てねエ!!」

ポップ子はきびすを返して逃げ出した。近くに打ち捨ててあったバイクを起こし、大慌てでエンジンふかして遠ざかっていく。

ピピ美はその背中を眺め見て、楽しそうに微笑んだ。

「んもう♡ ; 焦じらしてくれちゃってえ♡ ;」

ピピ美は走り出した。直後、彼女は音速を突破し、衝撃波が周囲を薙ぎ払っていった。

*

一方そのころ。

神奈川県足柄下郡箱根町。

金時山観測所（仮設）。

作戦遂行のため急造された観測台。

矢口蘭堂は、自衛隊員たちとともに、放射線防護服を着てこの場に待機していた。

観測員が報告する。

「ポップ子およびピピ美、仙石原より芦ノ湖方面へ向けて移動開始！」

「誘引目標ラインを突破！」

「大臣、作戦第一段階完了しました」

ポップ子はやってくれた。作戦どおり。

矢口蘭堂が力強くうなづく。

「ポップきちのバクチン大作戦、第二段階を開始してください！」

*

全速力のバイクで逃げるポップ子を、ピピ美は徒歩で猛追する。

「ウフフ♡； まてまてー♡；

ピピ美の口から放射線流が発射された。ポップ子は慌ててバイクを乗り捨て、横に跳躍して逃げる。飴のように融けて爆発するバイクを尻目に、ポップ子は市街地の影に飛び込み、姿を消した。

ピピ美は十字路の真ん中に立ち、周囲をぐるりと見回した。まだまだ上機嫌だ。

「今度はかくれんぼか。もーいーかい？」

「もーいーよー！」

返事は、背後から聞こえた。

振り返ったピピ美の胴に、ポップ子が撃ち出した対戦車ロケット^H^E^A弾が命中する！

炸裂。爆炎に飲まれたピピ美だったが、この程度でゴジラ化した皮膚は貫けない。すぐさま煙を切り裂き飛び出して、ポプ子めがけて殴りかかろうとする。

が、ポプ子の姿はすでに消えている。

——!?

とまどうピピ美の後頭部に、今度は対物ライフルの銃弾がめり込んだ！

ゴジラ化しても身体が大きくなったわけではない。ピピ美の質量はふつうの女子中学生なみだ。たとえば皮膚を貫けなくとも、対物弾の圧倒的な運動エネルギーによって弾き飛ばすことはできる！

ピピ美の身体が紙のように吹き飛ばされ、ビルの外壁に激突する。

その瞬間、ビルの各部に仕掛けられた爆弾が起爆した。

「なにつ?!」

驚愕するピピ美の頭上に、ビルひとつ分のコンクリート塊が降りそそぐ！ 一見地味に思えるが、大質量とビルの高さによってもたらされる莫大な位置エネルギーは、戦車砲などの比ではない。なすすべもなく、ピピ美はガレキの下に押し潰された。

ビルの崩落が終わり、砂煙がおさまったころ。

ポプ子は軽機関銃をぶら下げて、崩落したビルのそばに姿を現した。

感じる。

ピピ美はまだ、生きている。

その予感どおり、ガレキの山が揺れ、その頂上のコンクリート塊が蹴散らされて、ピピ美が姿を現した。尻尾はなかばで折れ、ひどい流血が何ヶ所もある。ダメージは与えた……しかし、まだまだ戦えそう

だ。

ピピ美は不機嫌になっていた。

ロケット砲、対物ライフル、ビルが倒壊するよう仕掛けられた爆弾。

明らかに、ピピ美と戦うためにあらかじめ準備されていたものだ。つまりピピ美は——

——罠に誘い込まれたというわけか。

これはポップ子らしくないやりかただ。ポップ子の性格なら、後先も考えず、目の前の敵のことだけ考えて、がむしやらに戦いを挑むはずだ。しかもポップ子は、先程から一度もパクリネタを使っていない——気功波も、スタンド能力も、黒魔術も、なにもだ。

そこでふと、ピピ美の頭にひらめくものがあった。

——まさか!?

ちようどその時。

背後——遙か遠く、塔のようにそびえ立つゴジラの方角で、轟音が鳴り響いた!

*

「ロックボルト粉碎!」

ガバンツ!!

ゴジラの脚の下で、人工地盤を支えていたロックボルトが爆破された。

そのとたん、人工地盤が、その下の巨大な地下空間に落下を始める。

ゴジラの巨体もろともに!

ゴジラが叫び声を上げながら、1000m近くもの高さを落下し、その下の地面に叩きつけられた。

*

箱根町、仙石原。

ゴジラが足を止めた場所がここであったのは、幸運な偶然だった。

ここは、来たるべき遷都に向けて建設予定の、第3新東京市予定地だったのである。

ビルや道路などはまだまだ未完成であるものの、広大な地下空間の上を塞ぐように作られた人工地盤や、雛形となるいくつかのビルは建造済み。

そして——前回のポップ子との戦いから明らかになったゴジラの弱点。

身体が大きすぎるゴジラは、体勢を崩されること——つまり、落とし穴に弱い！

これらの材料から、ゴジラを地下空間——ジオフロントに突き落とす作戦を、統合任務部隊が立案したのである。

*

金時山観測所（臨時）で自衛官が報告する。

「ゴジラ、ジオフロント内に到着！」

それを受けて、矢口蘭堂の指示が飛んだ。

「無人第3新東京市爆弾、投下！」

*

ゴバツ!!

ゴジラの頭上で、人工地盤と建設途中のビルとが、すべて一斉にロックボルトを外された。

莫大な量のコンクリートと金属——都市ひとつぶんの巨大質量が、丸ごと、ゴジラの頭上に降りそそぐ。

ゴジラの悲鳴が響き渡る。
さらに。

ビルの中に満載されていた爆薬に点火。

凄まじい大爆発が、ジオフロント全体を吹き飛ばした!!

*

「な……！」

大爆発の閃光が空を染め上げ、恐るべき威力の爆発が地震さえ引き起こす。

耳をつんざくようなゴジラの悲鳴が爆発音に飲まれて消えていき、ピピ美は、焦って額に指を当てた。

——まずい！ 瞬間移動でゴジラを助けに行かなければ！

だが、ピピ美に銃弾が雨あられと打ち込まれる。ポプ子のしわざだ。ピピ美は舌打ちしてその場から飛びのき、物陰に引っ込むが、今度はそこに手榴弾が投げ込まれる。

爆発。

これでやられるようやピピ美ではない。が、爆発が収まるや再びポプ子の機関銃が襲ってくる。

瞬間移動唯一の弱点は、移動先の相手の気を探るのに時間がかかること。この連続攻撃は、明らかにピピ美の瞬間移動を妨害して足止めする意図だ。

「そういう……」

ピピ美の不機嫌が、頂点に達した。

「ことかアーツ!!」

周囲に、無差別に放射線流がまき散らされる。建物という建物、障害物という障害物を薙ぎ倒し、まるで八つ当たりめいた執拗さで、破壊のエネルギーをぶちまけていく。

やがてポプ子が姿を現した。ピピ美は憤怒に燃えている。

「ポプ子——私をゴジラから引き離す作戦の、コマになったな!？」

貴様ともあろうものが、政治家ごときにそそのかさされて!!」

「そうだよ。うまくいったらいい」

「なんだ？ ナメプか？」

なぜ正面からかかってこない？

なぜパクリネタを使わない!？」

「実は、こないだからビームとか出せなくなっちゃって」

ポプ子は、ポリポリと気恥ずかしげに頭をかいた。

「ホントは自分の力でやりたかった。

でも、いい。」

ピピ美ちゃんを助けられるなら、コマで上等!!」

ピピ美が崩れ落ち、膝をつく。そして、一語一語、噛みしめるように語りだした。

「ずっと、こんな日が来るのを、恐れていた。

分かっていた……いつまでも子供のままでいられないことは。

いつか遠くに行ってしまうことは。

それでも……ずっとそばに居たかった。

私だけが……ポプ子の理解者でいたかったのに……」

「ピピ美ちゃん……」

ポプ子は、ピピ美のそばに歩み寄った。悲しむ彼女を見ていられなくなり、その肩に、そっと手を乗せる。

と、そのとき。

「……こんな結末、認めるものか」

ピピ美の身体が、煙のように溶けて消えた!

「なにっ!?!」

ポプ子が驚愕に顔をこわばらせる。

——この能力は……分身!^{ダブル}!

ピピ美は念能力で生み出した分身^{ダブル}と入れ替わっていたのだ。

おそらくは……ポプ子の手榴弾が炸裂して一瞬姿が隠れた、あの時に!
に!

ならば今、本体はどこに——?

はっ、と気づいて、ポプ子が顔を上げる。

「やっべ!!」

*

第3新東京市地下、ジオフロント。

ここでは今、倒れて活動停止したゴジラに、血液凝固剤の経口投与

が急ピッチで進められていた。

かねて準備のコンクリートポンプ車がゴジラのまわりに群がり、ストローのようなアームを口の中に差し込んで、薬品を流し込んでいく。

そこへ。

瞬間移動で、ピピ美の本体が出現した！

「か———っ!!」

ピピ美の口から放たれた放射線流が、ポンプ車部隊をなぎ払う。

それだけではあきたらず、背後にひかえていた予備のポンプ車たちにまでピピ美は攻撃を加えた。

部隊は壊滅し、ゴジラ凍結の切り札、血液凝固剤が、一滴残らず蒸発していく！

ピピ美はゴジラのそばに、舞空術で滑り寄っていった。

十分量を投与される前に防いだとはいえ、ゴジラの血液凝固は始まっている。

このままでは、体内の生体原子炉が、メルトダウンを避けるため、自動的に凍結を始めるだろう。

ピピ美は優しく微笑んだ。

ゴジラの鼻先を、そつとなでながら。

「もう

これで

終わってもいい
だから

ありったけを」

*

その瞬間。

血赤の閃光が、地下から天までを貫き通した。

芦ノ湖畔では、ポップ子が。

金時山観測所では、矢口蘭堂たちが。

そして、事態の推移を見守る世界中の人々が。

同時にそれを目撃した。

ジオフロントから――

ゆっくりと、浮上してくる真紅の巨体。

まるで血を流すかのように、痛々しい炎を垂れ流す――その姿は、
さながら、世界に滅び^{ラグナロク}をもたらす炎の巨人。

手のひらの上には、逆立てた長い髪を、数メートルもの高さにまで
なびかせる、少女の姿。

神々しさすら覚えるその姿を見て。

矢口蘭堂の口から、ひとつの名がこぼれ出た。

「ゴジラ……最終形態だ……!!」

(つづく)

最終話 Gポプチン大勝利！ 希望の未来へレディ・
ゴーツ！

暗い部屋の中。

矢口蘭堂が、赤いスーツを着てイスに腰かけている。

「さて、みなさん……」

いよいよお別れの時がやってまいりました。

私には、もう何も説明すべきことは残されていません。

そう!!

これが最後のポプテピファイト!!!

みなさんご一緒にイーっ

レディ・ゴーツ!!!」

*

最終話

G^{ゴッド}ポプチン大勝利!

希望の未来へレディ・ゴーツ!

*

ポプ子は、全速力で走っていた。

突如として変身をとげた、ゴジラ最終形態のもとへ。

そして、ピピ美のもとへ。

「待ってて！ ピピ美ちゃんツ!!

今、私がああああ!

行く！

行く………！（残響）

行く………！（残響）

行く………！（残響）

行く………！（残響）

行く………！（残響）

行く………！（残響）

行く………！（残響）

行く………！（残響）

行くッ!!（迫真）

*

ピクッ。

ピピ美の顔が、わずかに震えた。

ピピ美は、ポップ子の声を拒絶するように、首を振り、ゴジラにそつと手を触れた。

「行こう、ゴジラ。」

何もかもぶち壊して——新世界へ！」

ゴジラが吠えた。

ゴジラは、全身から赤熱した炎をまき散らし、その後、忽然と姿を消した。

*

東京都立川市。

立川災害対策本部予備施設。

巨災対は、予想外の事態に混乱していた。

ずっとモニターを見守っていた官僚たちが、状況が急変するや、情報収集に駆け回りはじめる。

これほどの事態でもパニックを起こさないのはさすがだったが、そんな彼らでさえ、焦りと恐怖を隠すことはできなかった。

「ゴジラがさらに形態変化！」

「放射線量観測メーター、計測不能を示しています！」

「凝固剤が効かなかったのか？」

「逆だ。凝固剤が効いたために生体原子炉が暴走を始めた。だがメルトダウンを防ぐリミッターをゴジラ自ら解除したんだ！」

「つまり、捨て身の攻撃ってわけですか!？」

「これではゴジラ自身の肉体も早晚崩壊する……」

だが、それまでにとんでもない被害が出るぞ！」

「まさに最終形態か！」

関係省庁に連絡急げ！ 住人にはなるべく地下かコンクリの建物に隠れるように！ とにかく遮蔽を取らせるんだ！ 日本中……いや世界中のどこが襲われるか分からんぞ！」

その矢先。

外から悲鳴が聞こえた。

一同が窓にはりつく。

頭上を埋める真紅の巨人。

その手のひらにたたずむ少女。

瞬間移動で現れたのだ。

——ゴジラとピピ美！

「なぎはらえ」

ゴジラの口から放たれた放射線流が、一瞬にしてあたりの全てを蒸発させた。

森文哉

志村祐介

尾頭ヒロミ

立川始

安田龍彦

小松原潤

竹尾保

袖原泰司

間邦夫

根岸達也

町田一晃

泉修一

他、巨大不明生物特設災害対策本部構成員、関係者等。
全員、死亡。

*

アメリカ合衆国、ニューヨーク州、ハドソン川河口付近。

ゴジラとピピ美が上空に出現。

マンハッタン島全域、消失。

続いてイングランド、ロンドン。

ゴジラの放射線流によってクレーター化した後、海水が流入。
北海に繋がり、ゴルゴ湾となる。

そしてブラジル、アマゾン熱帯雨林。

灰燼に帰す。

これによって、地球の酸素供給量は激減し、全生命体の絶滅——
世界の亡失が確定した。
ロストワールド

*

日本

神奈川県足柄下郡箱根町。
金時山観測所（仮設）跡。

ゴジラ暴走の余波で崩壊した観測台。
矢口蘭堂は、そのそばで倒れていた。
矢口蘭堂がうめき、目を覚ます。

近くに座り込んでいたポプ子が、声をかける。

「よう。お目覚めかい？」

矢口蘭堂、痛みをこらえて起き上がる。

「ゴジラはどうなりました!？」

ポプ子が、スマホをホイッと投げ渡す。

画面には、世界中の惨事を知らせるT w e e tが、猛烈な勢いで流れていた。

やがて、それも止まった。

T w i t t e rがサーバーダウンしたのだ。

矢口蘭堂、膝から崩れ落ちる。

「なんてことだ……」

ポプ子は、落ち着いて釘バットと銃の手入れをしていたが、銃にジャキツツ！ とマガジンを差し込んで、立ち上がった。

「矢口さん。」

ヘリー台、都合つけてくれ」

矢口蘭堂、信じられない、という目でポプ子を見る。

「まさか……ポプ子さん！」

戦う気なのか!？」

ポプ子はまだ、いつもの、静かな闘志に満ちた目をしている。

「矢口さん……あんたには感謝してる。」

でもよ。これだけは、ワガママ言わせてくれや」

「断じて受け入れられない！」

ゴジラ最終形態は、もはや人にどうにかできるレベルを越えている。

あなたは強い。だが神じゃない。魔物でもない。あたりまえの間なんだ！

とうてい勝てるわけがない！

なのに……

どこへ行くんだ？

なんで行くんだ？

わざわざ命を捨てに行くってわけか!？」

ポプ子。

水のように澄んだ、微笑みを浮かべる。

「死に行くわけじゃない。

——私がホントに生きてるかどうか、確かめに行くんだ」

*

東京都心。

現在は、一面の荒野と化した場所。

その中心に、燃え盛るゴジラと、その手の上のピピ美だけが、静かにたたずんでいた。

ゴジラの前に、人影が現れた。

ポプ子だ。

ピピ美、ポプ子を見ると、ニヤリと笑う。

「ようやく目が覚めたか。

いつか言ったはずだ、ポップ子。

おまえを殺せるのは、私だけだ」と

ポップ子、笑い返す。

「そのままお前に返すぜ、ピピ美」

一瞬の静寂。

その後、ゴジラが放射線流を放った。

地面が裂け、岩盤がめくれあがって岩山と化する。

ポップ子は、横に跳んで放射線流を避け、そり上がる岩盤の上を走った。

狙いは一直線、ピピ美。

ポップ子が岩盤の頂点からジャンプ。

ピピ美に向かって釘バットを振り下ろす。

しかしピピ美は舞空術でポップ子の頭上を飛び越え、背後から放射線流を吐いた。

ポップ子はゴジラの腕を蹴り、横に跳んで避けた。

その軌道を狙って、今度はゴジラ本体から放射線流が飛んでくる。

ポップ子が空中で身をひねってかわすと、さらにピピ美からも砲撃。

ゴジラとピピ美は、絶妙なコンビネーションで、たえまなく十字砲火を浴びせてくる。

ポップ子はゴジラの身体を蹴り、岩山に飛び移り、次々に粉碎され弾け飛ぶ岩盤を盾にして、なんとか攻撃の雨を避け続ける。

ピピ美は容赦なくポップ子を追い込みながら、叫んだ。

「さあ、ポップ子！

呪文を唱えろ！

プライマルアーマーを張れ！

怒りの力で都合よく潜在能力か何か覚醒させるがいい！

みんなやっつてることだ、何が悪い!?

コドモになれよ！

ネタをパクれよ！

オリジナリテイなんか捨ててしまえ！」

ポップ子は応えた。

「そんなことはどうでもいい！」

ピピ美、キレた!!

「なんだア？ てめエ……

ならば!! 死ね——ツ!!」

「ピピ美が、全力全開の放射線流を吐く！

極太のビームが、岩の盾ごとポップ子を飲み込んでいく！

ポップ子は——静かにつぶやいた。

「ようやく気づいたんだ。

師匠が言ってたことの、本当の意味。

私のオリジナリテイ、それは——！」

爆発!!

*

爆発の閃光が、おさまる。

ピピ美は、静かに空中に浮遊している。

ポップ子が消し飛んでしまったあとを、虚しく見つめながら。

「ポップ子……」

が。

そのとき。

ピピ美の背後から、返事があった。

「はーっ♡」

ポプ子!!

一体いつの間に背後に回り込んだのか？

ピピ美は、ハッ、と気づいて「凝^{ギョウ}」をした。

ポプ子の手から伸びたオーラが、ピピ美の背中に貼り付いている。

——「伸縮自在の愛^{バンジীগム}」!!

変化系の念能力!

「伸縮自在の愛^{バンジীগム}」は、ガムとゴムの性質をあわせもつ!

これをピピ美に貼り付けておいて、砲撃の瞬間、閃光にまぎれて収縮させたのだ!

ポプ子の手が伸びる。

ピピ美は、攻撃が来ると考えて、反射的に放射線流を吐き出したが。

ポプ子の手は、ピピ美を攻撃などしなかった。

ただ。

ピピ美の頭から——1本の針を引き抜いたのだった。

「はは……やっぱりな。

ゴジラの野郎、こんなもん差し込んでやがった。

ピピ美ちゃんの頭の中にさ」

ピピ美が、目を見開く。

——洗脳の針……だと!?

針を抜かれたとたん、いままでどんよりと雲におおわれていたピピ美の意識が、一気に晴れていった。

昔の自分が、ポプ子への素直な気持ちだが、せきを切ったように蘇ってくる。

ピピ味は正気に戻った!

しかし、ポプ子に向けてすでに吐き出してしまった放射線流は、止められない。

——ダメだ！ 止まれ!!

ピピ美の願いもむなしく。

ポップ子の胸を、ビームが貫いた！

「ポップ子ちゃん!!」

*

ポップ子は、ピピ美の思考が歪められていることに、前々から気づいていた。

ピピ美はただ蘇っただけではない。ゴジラによって、頭脳を操作されているはずだ、と考えた。

だから、はじめから、ピピ美の洗脳を解くことだけを狙っていたのだ。

たとえ自分が犠牲になっただとしても。

「パクリでも、クソと言われても、かまわない。

でもピピ美ちゃんだけは、絶対に助ける！

それが私の……オリジナリティだ……!!」

ポップ子は、血を吐きながら、ウインクした。

「えへへ……怒った?」

そのまま——ポップ子は落下した。

力を。

命を。

自分の持つ全てを——使い果たして。

そして、ピピ美は。

「……つたぞ……」

ピピ美の目に、炎が灯った!!

「怒ったぞ——っ!!!!!!」

ちょうどその時、ゴジラが異変を感じて、無差別攻撃を開始した！洗脳が解けた以上、ピピ美は、ゴジラにとって危険な敵でしかない。先手を打って叩き潰すつもりなのだ。

ピピ美は、舞空術で真下に向かって飛んだ。

雨あられと降り注ぐ放射線流を、かいくぐり、受け流し、時には正面から弾き飛ばして、まっすぐに、ポップ子を追う。

ポップ子に追いつき、冷たくなった身体を抱きしめ、その耳元でささやく。

「ひとりで死ぬなんて許さない！

ポップ子がいなきや……私が生きてたってしょうがないじゃないか!!」

そのとき、肌を通じて、ピピ美に小さな振動が伝わった。

鼓動？

馬鹿な！ ポプ子は完全に死んでいたのに——

——まさか！ 死後に強まる念!!

そう。ポップ子はただ死んだわけではなかった。

ピピ美を助け、自分も生き残るために、賭けに打って出たのだ。

——どうせ死ぬなら……試してみるか♥

念よ!!

私が死んだ後蘇り!!!

心臓と!! 肺を!!

愛撫
収縮せよ!!!

ドクン!!

ポップ子の身体が脈打ち、パツチリと目を開いた！

「やあピピ美ちゃん♥

私、今ちゃんと死んでた？」

「完全に死んでたよ♡」

「そっかー♡」

そこへ。

ゴジラからの放射線流が直撃した!!

「プライマルアーマー展開!!」

「ATフィールド全開!!」

ビキイイイン!!

二重に張られたバリアによつて、ゴジラ最終形態の、大陸さえ蒸発させる放射線流が、かき消された!!

ポップ子と。

ピピ美は。

背中合わせに地面に降り立ち。

ゴジラを見上げ、睨みつける。

「あとは、あいつを殺るだけだ!!」

ピピ美がゴジラの足元へダツシユ!

そして、

↓(タメ)

パンチー!

P

「ピピ美NOWOBHM!!!」

飛び上がりざまにピピ美が繰り出した衝撃波が、ゴジラを直撃した
!
よろめくゴジラの背中側に、今度はポップ子が回り込む!

「超必殺!」

↓ ← ↓ P P P

「メガポプ子対空ウ!!」

ドツゴオオツツ!!

ポプ子が放ったジャンピングアッパーが、ゴジラの背骨を完全にとらえた!

その姿はさながら昇り龍!!

ゴジラも負けてはいない。

空中に飛び上がり、無敵時間も終わってしまい、無防備となったポプ子。

そこを狙って、尻尾でなぎ払いをかける。

岩山そのもののような巨大な尻尾が、ポプ子に叩きつけられた。

「ぐえっ!」

そのまま、ゴジラは尻尾でポプ子を地面に押し潰そうとする!

窮地からポプ子を救ったのは、ピピ美。

「天派!・流星気散弾!!」

ピピ美の手から、数えきれないほどの光弾が一気に放出され、ゴジラの頭を横から襲う!

大爆発!

一瞬、尻尾が緩んだ隙に、ポプ子が跳躍。

ゴジラの鼻先に飛び上がる。

「アーバン流……空中連撃!!!」

嵐のように繰り出された拳が、ゴジラを滅多打ちにする!

さすがのゴジラも、これにはひるんだ。

それを見逃す。ポップ子とピピ美ではない！

地上におりたふたりは、顔を見合わせうなずきあう。

「好機!!」

「承知!!」

「七星エー双破斬!!」

「気功掌! 気功掌! 気功掌! 気功掌!」

「ロミオマストダイ空中六連蹴り!!」

「ドス竜——!!!」

「魔法剣キラキラ おやじの剣!!」

「長い声のネコ!!」

「火輪斬術雷戦段!! 連環重雷爆鎖炮!!」

「ちくわ大明神」

「『ついてこれないスピード』っていうのは——こういうのを言うんだ

(零距离射撃)」

「ガンマほうトルネード眼魔砲!! 失せろオーツツ!!」

「チャツピー、エサ!」

「わーう♡」

息もつかせぬ連続攻撃!

ゴジラが悲鳴をあげる。

そのとき、ゴジラの全身から、爆発のようにエネルギーがほとばしった!

「わあ!」

「ほんがらげーっ!!」

ポップ子とピピ美が吹き飛ばされる。

ついにゴジラは、体内に残った全ての力を、口に集中させはじめた。凄まじいエネルギー! チャージの余波だけで日本列島が震えだす。

あのゴジラが、全身全霊をかけて放つ、最大最強出力の放射線流！
おそろく——直撃すれば、地球そのものが崩壊する!!

ポプ子とピピ美は。

すつくと立ち上がり、並んで、ゴジラを見上げた。

ピピ美が、ニヤリと笑い、心からの称賛を口にした。

「ゴジラ……すごいやつだ。」

ここまでのエネルギーを秘めてるなんてな。

映画化したら、興収80億、円盤合計10万枚は行くに違いない
……」

「はー。私らが主演したことになんねーかなー」

「それな」

ポプ子とピピ美は、声を合わせて笑った。

一緒に笑い合える日がまた来た。その喜びを噛みしめながら。

ピピ美が腰に手を当てる。

「さーて。どうやって勝つ？」

ポプ子がポツリとつぶやいた。

「たしか、この丘だったんだよね……」

「え？」

「ちゃんとした宇宙船に乗ってこなかったばかりに、こんな所に落ち
ちゃった。」

何回も何回もテストに失敗してやっとここまで来たんだ。

そのおかげで、この国の国務大臣に会えたけどね」

ポプ子が、地下に視線を送る。

「おい……そろそろ目を覚ましてくれないか!？」

*

地下で。

グワツ……

巨大な目が……開く。

*

ファイファイファイ……

ピピ美が驚愕する。

「!!

こ……この音……」

ヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュ

ファイイイイン

ズゴゴゴゴ(ドコツ)ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

バリバリバリツ

「行くよ。乗ってー!」

地下から。

巨大な——人の形をしたものが、立ち上がる。

両腰に佩いた二振りの実剣。スパイド

肩に背負った、二つ折りの巨砲。バスターランチャー

そして——全身をあますところなく覆う、金色こんじきの装甲板。

次元を引き裂くかのようなエンジン音を響かせて、ゆっくりと身を起こす、その姿は、まるで——

黄金の

電気騎士!!

モーターヘッド
M H ナイト・オブ・ゴールド!

惑星デルタ・ベルンを牛耳る光の神アマテラスが創り出した巨大ロボット。

いや、巨大ロボットなどという枠におさまらない、神そのものの力を持つ究極の神機!!

星団最強の存在が、今——ゴジラの前に……立った!!

ポプ子は胸部コクピットに乗り込み、同じく頭部コクピットに入ったピピ美に通信を送る。

「ピピ美ちゃん、こいつは私でさえコントロールできなかつたんだ。注意して!」

「わかつた」

一方、ゴジラは本能で悟っていた。

目の前にいる、この黄金の巨人は、ただの機械などではない。

人の技術をはるかに超越した魔物——あるいは神そのものなのだと!

ゆえにゴジラは、迷わずナイト・オブ・ゴールドに狙いを定めた。最強最大の敵を、焼き尽くすために。

ピピ美がそれを察知する。

「ポプ子! バスターロックだ!」

「なに、こつちにだつてあるさ」

ナイト・オブ・ゴールドが、肩の巨バスターランチャー砲を展開した!

「エネルギーチャンバー内で正常に加圧中!」

「ライフリング回転開始」

「シアアの開放タイミングは私が!

トリガーをそちらに!」

「わかった！」

「当たれえ!!」

ゴジラの最終放射線流と。

ナイト・オブ・ゴールドの超破壊兵器が。

東京の空で、激突した!!!

カッ!!!

*

爆発の余波が、時空をひずませる。

そのために、空は、ゆらゆらと揺らめいて見える。

「ゴジラは……?」

余波が収まり、朝日がのぼり、洗淨を明るく照らし出す。

巨大不明生物の姿は——ない。

「目標、完全に沈黙——」

ポップ子とピピ美は、コックピットを飛び出した。

空中で、ふたりは固く抱きしめあった。

「勝利だ——っ!!」

(エピローグに、つづく)

エピローグ

矢口蘭堂が走ってくる。

「ポップ子きーん！」

ポップ子とピピ美、手を振って彼を迎える。

「おー！ 殺ったどー!!」

三人は、荒野と化した東京を、丘の上から眺めおろした。

矢口蘭堂は、目に涙を浮かべている。

「我々は勝利した……」

だが、その過程で失われたものは、あまりにも大きい……」

空に、死んでしまった者たちの顔が映し出されるように思えた。

大河内総理……

ヘルシエイク矢野……

マグマミキサー村田……

志村祐介……

デューク スカイウオークマン
公爵・空歩男……

Twitterで物申すマン……

尾頭ヒロミ……

ベーコンムシヤムシヤくん……

巨災対のみんな……

そして日本の……世界中の、数知れない犠牲者たち……

「みんな、死んでしまった。

もう……

戻ってくることは……ないんだ」

人々の死を悼み。

矢口蘭堂は、静かに涙した。

彼の背に、そっと優しく触れる手のひらがある。

左右からひとつずつ、彼に差し伸べられる手のひら。

ポップ子とピピ美だ。

「だいじょうぶだ」

ピピ美が力強くウインクした。

「ドラゴンボールで

生きかえられる!!!」

*

3日後。

みんな生き返った。

*

ポプテピピック

作：闇鴉慎

次の日、ピピ美が、ポップ子に手紙を持ってきた。

「今日はおたよりが来ています」

「ほう」

「『これまでの展開を全部だいなしにするドラゴンボールオチとか最低。』

こんなご都合主義ではずかしくないんですか。」

はじめから書き直しなさい』」

フフツ、とポップ子はほほえんだ。
そしてカメラ目線。

「こんな しょうせつに まじに
なっちゃって どうするの」

完

「ゴジラ vs ポプ子」

STAFF

原作

「シン・ゴジラ」

「ポップテピピック」

監督

俺

脚本

俺

シリーズ構成

俺

演出

俺

音響監督

俺

現場監督

俺

図書委員

俺

CAST

ポップ前ポップ助：俺

ピピ美：俺

矢口蘭堂：俺

尾頭ヒロミ：俺

ゴジラ：ややこしや

オルガ・イツカ：オルガ・イツカ

エンディングテーマ

「ロマンティックあげるよ（あげねーよ）」

作詞：豊臣秀吉

作曲：ガンダムF91

歌：星降そそぐwith地獄震撼楽団^{ヘルシエイカーズ}

制作・著作

俺

字幕 グンゼひろし

ポプテピピック

作：闇鴉慎

ポプ子は両手のこぶしを床に叩きつけた。

「とれてへんやんけーッ!!」

日間ランキング1位———!!!」

(2018/6/2現在)

ポプ子が電話をかける。

「もしもし? 闇^{ダク}?

ちゃんと他の作者に感想投げてお返し強要したの?

ツイコミュで信者囲い込み組織票は?

じゃ、複アカで10点爆撃も?

は?

アカロツク食らった??」

ポプ子、肩をすくめ、ため息をつく。

「はー。」

闇鴉^{ダク}慎^{シン}がまたやりおったわ」

The End

ここに悪は滅びた！

しかし

あらたなる敵が
ぼくらの街を襲う！

星色は!?

Does Girldrop
ever exist?

新番組

ゴジラvsジヤンガリアン

c
o
m
i
n
g

s
o
o
n